

田原本町埋藏文化財調査報告書 第3集

多遺跡発掘調査報告

—第18次調査—

2022

田原本町教育委員会

序

田原本町は、奈良盆地のほぼ中央部の肥沃な穀倉地帯に位置します。弥生時代には町北部の唐古・鍵遺跡、南部の多遺跡を中心に稲作文化が広がりました。多の地は、古代の十市郡の中央にあたり、古事記編纂で著名な太安万侶らを出した多氏の本拠地と考えられています。

多坐弥志理都比古神社（多神社）は、多氏の氏神として古代から祀られてきた由緒正しい神社です。この多神社境内で、平成10年に拝殿の建て替えに伴う調査を実施し、多くの成果を得ることができました。

今回、その成果を調査報告としてまとめました。ご覧いただき、ご指導願えれば幸いに存じます。最後に、この調査にご協力いただきました多神社宮司および氏子の皆様に厚く感謝申し上げます。

令和4年3月

田原本町教育委員会
教育長 植島 幹雄

例 言

1. 本書は田原本町教育委員会が実施した奈良県磯城郡田原本町大字多所在の多遺跡第18次調査の発掘調査報告である。
2. 調査は、多坐弥志理都比古神社からの委託により田原本町教育委員会が実施した。調査にあたっては多神社宮司多忠記氏並びに多神社氏子一同諸氏より多大なご理解とご協力を賜った。
3. 調査は、平成10年9月28日から同年11月2日までの期間で実施した。
現地調査は文化財保存課技師 清水琢哉があたった。
4. 発掘調査の作業及び補助、並びに整理作業には以下者があたった。
[現地調査] (括弧内は当時在籍していた大学)
作業員 (有) ヤマショウ
補助員 茂木麻予 (立命館大学)、吉村麻衣 (関西大学)、辻口菜穂子 (奈良大学)、
若江幾哉 (明治大学)
[整理作業]
末広真理子、早川伊津子、足立高子、中谷利枝、藤本智子、岸本満弥
5. 整理作業は、遺物の実測・トレース・写真撮影を清水がおこなった。遺構図のトレース作業は岸本と清水がおこなった。
6. 石種及び産地の同定は奥田尚氏 (奈良県立橿原考古学研究所共同研究員) に依頼し、同氏からは玉稿を賜った。
7. 本報告書の執筆・編集は清水・西岡成晃があたった。

目 次

本文目次

第Ⅰ章 多遺跡の位置と環境	
第1節 多遺跡の地理的環境	1
第2節 多遺跡周辺の歴史的環境	1
第3節 多遺跡の既往の調査	6
第4節 多氏と多坐弥志理都比古神社の歴史	8
第5節 多坐弥志理都比古神社の概要	10
第6節 多坐弥志理都比古神社の拝殿建築について	12
第Ⅱ章 発掘調査の成果	
第1節 調査の契機と過程	23
第2節 調査の成果	
1. 遺構	24
2. 遺物	39
第Ⅲ章 石材の採石地について (奥田 尚)	51
第Ⅳ章 まとめ	
第1節 史料から見た多神社の建築史	56
第2節 近世後半の建物について	56
第3節 近世初頭の建物について	57
第4節 多神社の宮郷について	58
第5節 まとめ	58

挿図目次

第1図 多遺跡の位置	1
第2図 田原本町周辺の遺跡地図	2
第3図 多遺跡周辺の歴史的環境	4
第4図 多遺跡のこれまでの調査	7
第5図 多遺跡境内配置図	9
第6図 多神社本殿・拝殿平面図	11
第7図 旧拝殿写真	15
第8図 旧拝殿棟端飾り瓦(1)	16

第 9 図	旧拝殿棟端飾り瓦 (2)	17
第 10 図	旧拝殿棟端飾り瓦 (3)	18
第 11 図	旧拝殿棟端飾り瓦 (4)	19
第 12 図	多神社旧拝殿鬼瓦 1	20
第 13 図	多神社旧拝殿鬼瓦 2	21
第 14 図	旧多観音堂鬼瓦	22
第 15 図	基壇築造過程の概念図	24
第 16 図	S B -01 遺構実測図 (最終時)	25
第 17 図	S B -01 遺構実測図 (近世後半)	27
第 18 図	S B -01 礎石裏込石検出状況実測図	30
第 19 図	S B -01 柱穴完掘状況実測図	31
第 20 図	調査風景	32
第 21 図	S B -51 ~ 54 完掘状況実測図	34
第 22 図	S B -51・52 礎石裏込石検出状況実測図	35
第 23 図	S B -53・54 礎石裏込石検出状況実測図	36
第 24 図	中世以前の遺構実測図および層序	37
第 25 図	土器	40
第 26 図	軒丸瓦 1	43
第 27 図	軒丸瓦 2	44
第 28 図	軒平瓦	45
第 29 図	道具瓦 1	46
第 30 図	道具瓦 2	47
第 31 図	平瓦・棧瓦	48
第 32 図	金属製品	49
第 33 図	出土銭貨	50
第 34 図	裏込石採取地	51
第 35 図	近世宮郷の分布	58

表目次

第 1 表	多遺跡調査一覧	8
第 2 表	S B -51 ~ 54 主軸一覧	29
第 3 表	柱穴一覧	33
第 4 表	遺物観察表	42
第 5 表	鉄釘一覧	49

第 6 表	錢貨一覧	50
第 7 表	裏込石の石種と岩相及びその採石地	52
第 8 表	裏込石の石種別集計表	55

図版目次

図版 1	調査着手
図版 2	近世末の状況 (1)
図版 3	近世末の状況 (2)
図版 4	近世後半の礎石と裏込石 (1)
図版 5	近世後半の礎石と裏込石 (2)
図版 6	近世後半の礎石と裏込石 (3)
図版 7	近世後半の礎石設置穴発掘
図版 8	近世前半の遺構検出と掘り下げ
図版 9	近世前半の建物跡 (1)
図版 10	近世前半の建物跡 (2)
図版 11	近世前半の建物礎石裏込石断面 (1)
図版 12	近世前半の建物礎石裏込石断面 (2)
図版 13	近世前半発掘 (1)
図版 14	近世前半発掘 (2)
図版 15	基壇の断面
図版 16	出土遺物 1 土器
図版 17	出土遺物 2 軒丸瓦
図版 18	出土遺物 3 軒平瓦
図版 19	出土遺物 4 道具瓦
図版 20	出土遺物 5 棧瓦・平瓦

第 I 章 多遺跡の位置と環境

第 1 節 多遺跡の地理的環境

奈良県北西部に広がる奈良盆地は、西側の生駒山及び金剛・葛城山系、東側の龍王山系、北側の平城山丘陵、南側の吉野山系によって画された南北約 25 km、東西約 20 km の南北に長い盆地である。

盆地北半では佐保川・富雄川等が南流し、盆地南半では初瀬川・寺川・飛鳥川・曾我川・葛城川・高田川が北流する。これらの河川は盆地中央付近で合流して大和川となり、生駒山系と葛城山系の間にある亀の瀬という溪谷部を通過して河内平野へと西流する。盆地内の地形は主にこれらの河川によって形成された沖積平野から成るが、一部矢田丘陵・馬見丘陵等の低丘陵を含む。

田原本町は、奈良盆地中央やや南寄りに位置する。町内を初瀬川・寺川・飛鳥川・曾我川が北流し、これによって形成された沖積平野が町全体に広がる。本町南端の大字多に広がる遺跡が多遺跡である。

多遺跡は、標高 50 ～ 53 m の沖積平野に立地する、弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。遺跡の中央を飛鳥川が北流しているが、かつては高地である遺跡の周辺を北西方向に流れていたと考えられる。現在の飛鳥川の流はほぼ南北軸に合致しており、人為的な川の付け替えがあったことは確実であるが、その時期については明確でない。

行政区分としては奈良県磯城郡田原本町の南部に位置する大字多とその周辺、一部が橿原市飯高町にかけて広がる。いずれも近世までの旧十市郡に属する。

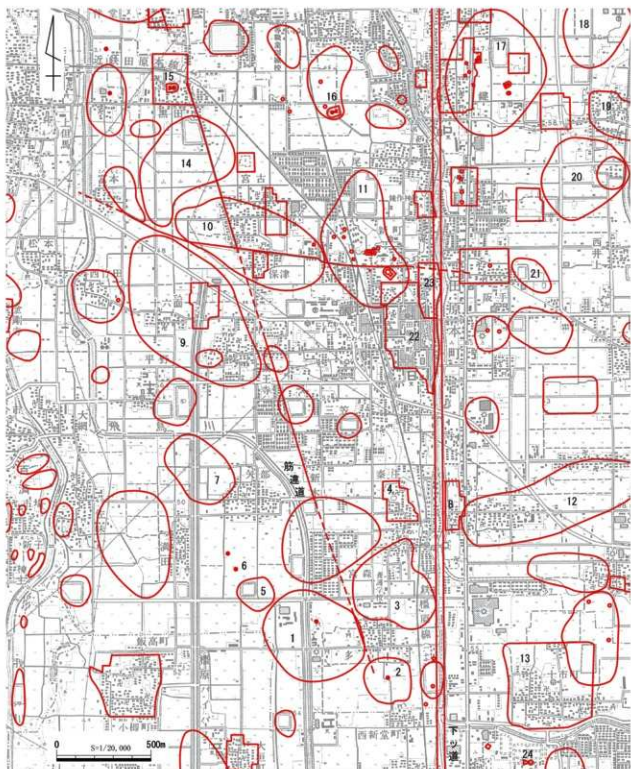
多遺跡中央の飛鳥川東岸には式内大社 多坐 弥志理都比古神社が鎮座し、広大な境内地には社叢が広がる。また、周辺は条里制地割の水田地帯となっているが、近年遺跡北部で福祉施設や養護学校等が相次いで建設され、景観が徐々に変わりつつある。

第 2 節 多遺跡周辺の歴史的環境

田原本町周辺の沖積平野では、縄文時代草創期頃に人の生活の痕跡がみられるようにな



第 1 図 多遺跡の位置



遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代
1 多遺跡	弥生～中世	9 十六面・薬王寺遺跡	古墳・中世	17 唐古・鍵遺跡	弥生～中世
2 多新堂遺跡	古代・中世	10 保津・宮古遺跡	弥生～近世	18 法貴寺北遺跡	弥生・中世
3 秦庄遺跡	縄文・古墳	11 羽子田遺跡	弥生・古墳	19 法貴寺遺跡	中世
4 秦楽寺遺跡	古墳・中世	12 千代遺跡	中世	20 法貴寺斎宮前遺跡	弥生～中世
5 矢部南遺跡	弥生	13 十市城跡	中世	21 飯手東遺跡	弥生
6 団栗山古墳	古墳	14 宮古北遺跡	弥生～古代	22 寺内町遺跡	中世・近世
7 矢部遺跡	弥生・古墳	15 黒田大塚古墳	古墳	23 平野氏陣屋跡	中世・近世
8 日光寺推定地	古墳・中世	16 釜鉢山1号墳	古墳	24 弁天塚古墳	古墳

第2図 田原本町周辺の遺跡地図

る。多遺跡の採集品及び保津・宮古遺跡の出土品に有舌尖頭器があり、縄文時代のはじめには田原本町周辺で狩猟活動がおこなわれていた可能性が考えられる。ただし、盆地低地部での定住は縄文時代後期頃からとみられる。秦庄遺跡で後期の土器が出土しているほか、保津・宮古遺跡では縄文時代後期の遺構を確認している。

縄文時代晩期には、弥生集落や方形周溝墓群の形成される場所で凸帯文土器片の出土が確認されていることから、弥生時代の集落の立地に近い場所に集落が存在した可能性がある。なお、唐古・鍵遺跡では、弥生時代前期初頭の遺物とともに縄文時代晩期の土器が出土している。

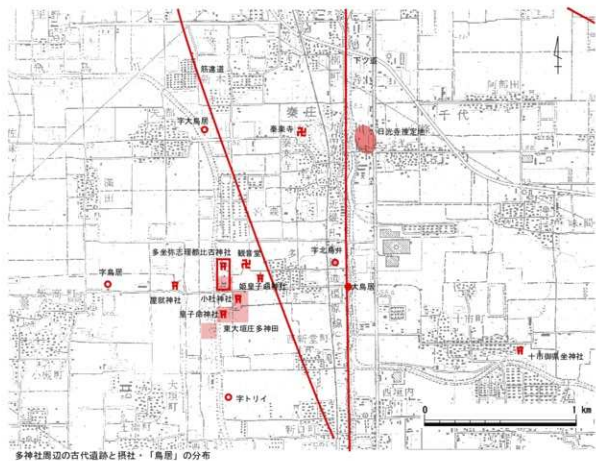
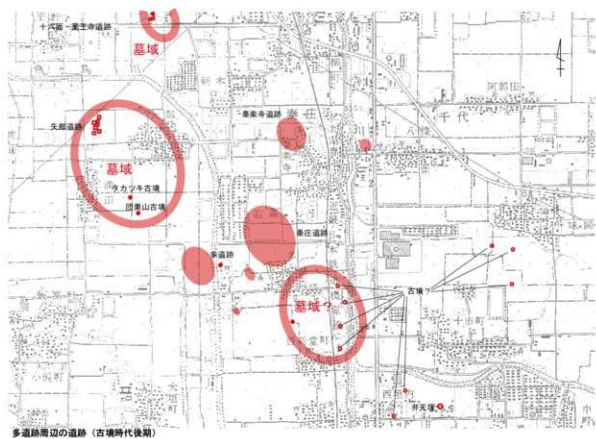
弥生時代前期には、田原本町北部の唐古・鍵遺跡、中央の保津・宮古遺跡、南部の多遺跡で集落が形成される。唐古・鍵遺跡及び多遺跡は環濠集落として地域の拠点となり、周囲に衛星集落を形成しながら地域の開発を進めていったようである。特に唐古・鍵遺跡は弥生時代前期から後期まで集落が継続し、近畿地方最大級の42haの規模を誇る。町内の弥生集落の数は、中期後半と後期後半の2時期に増加する。中期後半は拠点集落の周辺で衛星集落的な小規模集落が一時的に急増する現象で、後期前半には一時途絶するものが多い。一方、後期後半にも集落の数が急増する。これは鉄製農耕具の普及による耕地の拡大、古墳出現前夜の社会構造の変化に伴う拠点集落の求心力低下といった要因が背景となるようである。

古墳時代前期の旧式下郡城では、唐古・鍵遺跡で環濠の再掘削をおこなうものの規模は縮小傾向となる。一方、羽子田遺跡、保津・宮古遺跡、宮古北遺跡などでまとまった集落が確認されるようになる。このほか、八尾九原遺跡や黒田遺跡、三宅町三河遺跡で集落が確認されている。田原本町南部の旧十市郡城では、多遺跡及び日光寺推定地、秦楽寺遺跡で古墳時代前期～前期末の集落を検出している。

なお、古墳時代前期の墓域は基本的に集落縁辺部で方形周溝墓が確認できるが（羽子田遺跡、三河遺跡など）、唐古・鍵遺跡では500～700m離れた法貴寺北遺跡・清水風遺跡、多遺跡では500m離れた矢部遺跡で確認された方形周溝墓群が墓域となる可能性がある。また、川西町島ノ山古墳はこの時期としては地域唯一の大形前方後円墳であり、田原本町周辺に展開する集落群とは隔絶した存在である可能性がある。

古墳時代中期～後期では、多遺跡、秦庄遺跡、秦楽寺遺跡、十六面・葉王寺遺跡、保津・宮古遺跡などで集落遺構を検出している。

旧式下郡城では、羽子田遺跡が古墳時代前期末以降墓域となり、小規模な方墳が多数築造される。また、古墳時代後期には田原本町北部から三宅町・川西町にかけて前方後円墳が多数築造される（三宅古墳群）。黒田大塚古墳は6世紀初頭の前方後円墳で、全長85mを測る。また、笹針山1号墳は6世紀初頭の前方後円墳で、全長80m前後を測る。また、旧十市郡城の多遺跡周辺にも中小の古墳が展開する（第3図上）。多遺跡の北西約500mにある6世紀前半の矢部団栗山古墳からは、蛇行状鉄器をはじめとする馬具、竜雀銀頭、須恵器などの遺物が出土している。この団栗山古墳の北西170mにも小円墳とみられる墳丘があり、また、団栗山古墳の西側約50mで実施した試掘調査（S-200801）で古墳時代後期の溝を検出しており、団栗山古墳周辺にも埋没古墳が点在している可能性が考えられ



第3図 多道跡周辺の歴史的環境

る。矢部遺跡でも方形の小規模墳墓群を検出しており、一帯が墓域となっていたようである。一方、多遺跡の東南東700m付近には、古墳と伝えられる小墳丘が点在している。ただし、発掘調査がおこなわれていないため、古墳と断定することはできない。また、古墳時代前期の弁天塚が多遺跡の南東1.5kmに位置する。弁天塚周辺にも小規模古墳が点在しているが、大半が未調査であり、こちらもその内容は明らかでない。

古代の田原本町は、藤原京・平城京の中間にあつて集落がやや希薄な地域となるようである。ただし、筋違道、中ツ道、下ツ道、保津・阪手道といった古代道路跡の周辺で幾つかの遺跡を確認している。また、法楽寺（黒田）、法起寺（現千万院:法貴寺）、常楽寺（現粟師堂:宮古）、秦楽寺（秦庄）などの古刹、池神社、鏡作神社、多神社、村屋神社などの古社は古代道路に比較的近接した場所で造営されている（第3図下）。古代の遺構としては、筋違道と保津・阪手道が交差する地点に隣接する保津・宮古遺跡で7～8世紀の建物群などを検出している。円面硯や墨書土器などの出土から、官衙的機能をもつ施設が存在した可能性も考えられる。阪手北遺跡でも奈良・平安時代の遺構・遺物を検出している。古代の迎賓館「阿刀河辺館」の位置について『大和誌』では「阪手村の東にあり」としているが、遺跡に近接する位置であり、遺跡との関連が注目される。なお、田原本町多付近では顕著な古代の集落遺構を確認していないが、筋違道関連の側溝を多新堂遺跡で検出している。

なお、笹鉾山1号墳の周濠上層では奈良時代頃の遺物が出土しており、伐採された雑木の枝が周濠内に散在していた。古墳の維持・管理及び祭祀が奈良時代にも継続していたとみられる。同様の現象は三宅町三河1号墳（直径30mの円墳）でもみられる。

中世になると、盆地内の各地で中世集落跡が確認できるようになる。鎌倉時代頃の集落形態には不明な点が多いが、十六面・粟王寺遺跡などで一辺30～50mの溝で方形に区画した集落がみられるようになる。なお、寺内町遺跡の旧楽田寺門前や法貴寺遺跡の池神社周辺、保津・宮古遺跡の筋違道周辺及び常楽寺推定地などで井戸が広い範囲で確認される。門前町や街道沿いの町場として位置づけることができよう。

室町時代になると、周囲を大溝で囲んだ「環濠集落」が目立つようになる。これが中世豪族の平城へと発展する。文献に残るものでは、金剛寺城、佐味城、森屋平城、秦楽寺城などがあり、このうち金剛寺遺跡と秦楽寺遺跡では関連する大溝などを検出している。また、十六面・粟王寺遺跡（保津氏居館跡推定地）、唐古氏居館跡、唐古南氏居館跡、柿ノ森遺跡、小阪榎木遺跡、法貴寺遺跡、平野氏陣屋跡下層遺構（田原本氏居館跡?）などで中世居館跡を確認している。

近世には、田原本を領した平野氏が浄土真宗教行寺を誘致して寺内町を造営させ、のちに教行寺を退去させて陣屋町に取り込んだ。田原本の陣屋町は、近世中街道沿いで寺川水運も活用できる立地であったため、盆地中央部の商業都市として大いに発達した。また、この頃から現在の大字名の元となった旧村集落の位置が固定化した。現在の多集落は、地元の伝承ではもともと多神社の東、字宮ノ内にあつたという。多遺跡第22次調査では、15世紀代の大溝が字宮ノ内東端で確認されており、伝承にある旧集落の東を区画していたと考えられる。溝の廃絶時期から、近世初頭に現在の筋違道東側へと移動した可能性が

高い。同じく、大和の典型的な環濠集落の1つとされる保津環濠集落は、集落内部での発掘調査で鎌倉時代及び江戸時代の遺構を多数検出している一方で、室町時代の遺構はやや希薄である。いずれも近世初頭に現集落の位置に落ち着いたとみられる。なお、近世以来続く旧村集落は環濠をもつものが多く、大和低地部の集落の特徴ともなっている。

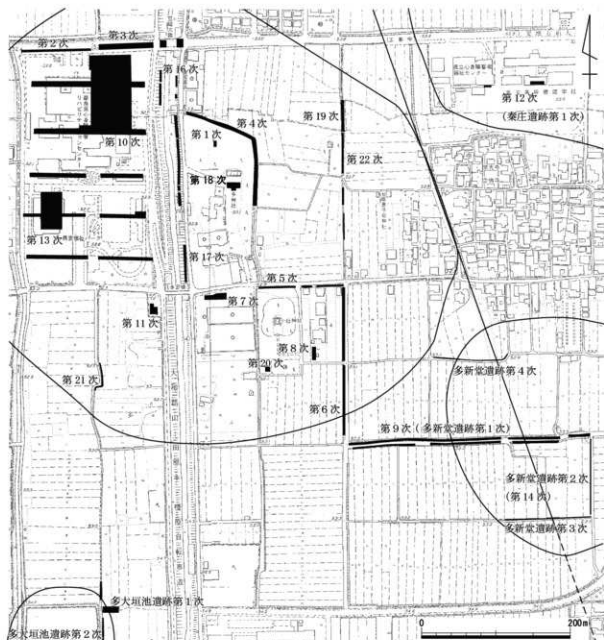
第3節 多遺跡の既往の調査

多遺跡は、1972年の飛鳥川堤防改修工事の際に多量の土器が出土したことなどから、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落であることが知られていた。1973年の石野博信氏の論文⁽¹⁾、1978年の寺沢薫氏の論文⁽²⁾でも拠点的な弥生集落の1つに数えられている。この遺跡では、1972年の同志社大学による発掘調査以来、40年間にわたり22次に及ぶ発掘調査がおこなわれてきた(第4図・第1表)。このうち、第4・6・9次調査の多地区の広範囲にわたる農業用水路改修工事、及び第10～13次調査の県立施設建設に伴う調査は奈良県立橿原考古学研究所によるもの、工場等の開発に伴う第7・8次調査は田原本町教育委員会によるものである。このうち、第9次調査地は周辺の内容が中・近世を中心とするもので、小字名からも多遺跡とは別の中世遺跡として捉えることが適当とみなされるようになった。このため、第9次調査地を含めた多遺跡南東部一帯は調査段階で多新堂遺跡に改め、多遺跡第9次調査を多新堂遺跡第1次調査と読み替えることとし、平成9年度に田原本町が実施する予定であった多遺跡第14次調査を多新堂遺跡第2次調査として実施することとなった。併せて、多遺跡の北東部で実施した多遺跡第12次調査も遺跡地図上では多遺跡ではなく秦庄遺跡の周縁部であることも確認された。ただし、この段階においては橿原考古学研究所で同時に進行していた飛鳥川護岸工事に伴う調査に第16・17次の番号が確定していたため、第14・15次調査は欠番扱いとなった(第15次は田原本町と橿原考古学研究所間の連絡ミスと錯誤により生じた欠番)。その後、多神社境内の第18次調査(本報告・田原本町実施)、遺跡北東部の第19次調査(県事業)、遺跡南部及び西部での第20・21次調査(田原本町実施)を経て、平成21年度には遺跡東部で第22次調査を実施している。

これまでの成果を総合すると、弥生時代前期～中期前半の環濠集落、中期中頃～後期の環濠集落、弥生時代末～古墳時代前期の集落の3点が多遺跡の主要な内容となる⁽³⁾。また、古墳時代後期の遺構も分布している。さらに、古代の水田跡、中世の居館?、近世の神社関連施設も含めた複合遺跡として捉える必要がある。

弥生時代前期の環濠集落に関わる遺構としては、第10・16・17次調査で環濠が、第4次調査で溝などが検出されている。また、遺跡東部の第19・22次調査でも木器貯蔵穴や溝、墓などの遺構を確認している。

弥生時代中期中頃～後期中頃の遺構は遺跡東部の第19・22次調査で確認している。また、遺跡中央の第4次調査でも検出しているようである。なお、遺跡西部の第10次調査では弥生時代中期頃の銅剣1点、後期～末頃とみられる小型銅鏡が出土している。第22次調査では、大和第VI-2様式までの遺物は多く出土するが、通常集落拡散期として遺物量が



第4図 多遺跡のこれまでの調査

増大することの多い第VI-3~4様式の遺物が極めて少ないことが特徴的な事象として確認されている。

弥生時代末~古墳時代前期は、第2・3・22次調査などで古墳時代前期の井戸などを検出している。また、第19次調査で検出した遺構は古墳時代初頭頃の堅穴住居となる可能性がある。

なお、古墳時代前期後半以降、多遺跡の北東に隣接して秦庄遺跡がまとまった集落として成立する。河跡を挟んで北東側に布留3式頃の集落が拡がり、5~6世紀の集落が遺跡南西側に拡がるようである。さらに、秦庄遺跡の北側に位置する秦楽寺遺跡では、5世紀後半~6世紀頃に琥珀玉や滑石製玉類を製造していたことが確認されている。田原本町多

第1表 多遺跡調査一覧表

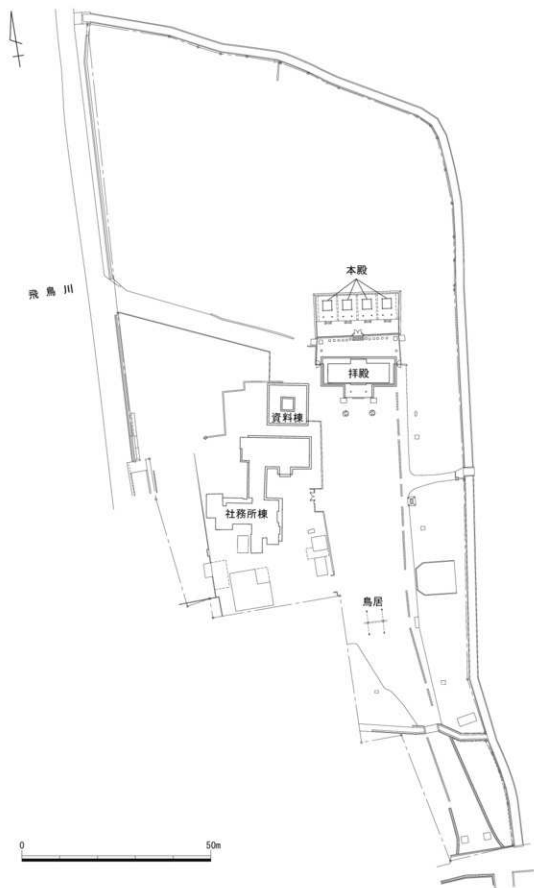
(大和弥生文化の会『大和の弥生遺跡基礎資料1』1995(加筆))

次 数	調査地点	調査期間	調査の理由	調査面積(m ²)	調査機関	担当者	遺構・遺物	備 考	文献
第1次	磯城郡田原本市多208-1	1972年11月22日～11月22日	多神社総合工事	5.4	同志社大学	安井良二			1
第2次	磯城郡田原本市多230	1977年10月24日～11月8日	墓道改良工事	320	橿原考古学研究所	河上邦彦	古墳時代の井戸、奈良時代の溝		2
第3次	磯城郡田原本市多64-1	1978年9月25日～10月21日	墓道改良工事	620	橿原考古学研究所	河上邦彦	古墳時代の溝・井戸・ビット・土坑		3
第4次	磯城郡田原本市多66-2地	1981年2月2日～2月21日	水路改良工事	1,090	橿原考古学研究所	藤井利幸	弥生時代の溝・横溝	試掘	4
		1981年8月12日～10月17日						本調査	5
第5次	磯城郡田原本市多530-3地	1983年1月10日～1月22日	水路改良工事	237	橿原考古学研究所	藤井利幸			6
第6次	磯城郡田原本市多284地	1983年12月13日～12月20日	水路改良工事	265	橿原考古学研究所	関川尚功	古墳時代の溝・自然水路		7
第7次	磯城郡田原本市多202-3地	1984年8月20日～9月7日	工場新築	160	田原本市教育委員会	藤田三郎	弥生時代の自然水路・溝		8
第8次	磯城郡田原本市多209地	1984年9月21日～9月25日	住宅新築	30	田原本市教育委員会	藤田三郎	弥生時代の自然水路・土坑		8
第9次(大森)	磯城郡田原本市多181地	1984年12月13日～1985年1月18日	水路改修・町道	1,350	橿原考古学研究所	佐々木好直	河、土坑、中世溝	多新交遺跡第1次に認め替え	9
第10次	磯城郡田原本市多722地	1985年7月22日～1986年10月7日	県総合子育てセンター建設	10,600	橿原考古学研究所	寺沢 薫	弥生時代の遺構・井戸・自然水路・土坑・掘削・本路		10
第11次	磯城郡田原本市多699-3	1985年11月1日～11月22日	駅前補修建設	200	橿原考古学研究所	寺沢 薫	方形区画墓(弥生前期)		11
第12次(大森)	磯城郡田原本市宮森34-1	1988年9月19日～10月3日	養護学校施設増改修工事	210	橿原考古学研究所	村山秀宏	中世の土坑	聖止遺跡第1次に認め替え	12
第13次	磯城郡田原本市多722	1985年5月29日～8月11日	福祉パーク建設	1,500	橿原考古学研究所	夏原俊介	中世の土坑、古墳時代の後期の河迹		13
第14次(大森)	磯城郡田原本市多84東側隣接地	1987年11月25日～12月5日	道路建設	120	田原本市教育委員会	清水球哉	中世大溝1条	多新交遺跡第2次に認め替え	14
第15次(大森)									
第16次	磯城郡田原本市宮森80-1東側隣接地	1997年11月18日～12月18日	堤防改修護岸工事	1,800	橿原考古学研究所	本村克保	弥生時代遺構・溝・土坑・ビット		15
第17-a 次	磯城郡田原本市多722東側隣接地	1988年1月13日～2月12日	堤防改修護岸工事	700	橿原考古学研究所	本村克保	弥生時代遺構・溝・土坑・ビット		15
第17-b 次	磯城郡田原本市多209-1西側隣接地	1988年2月23日～3月9日	堤防改修護岸工事	500	橿原考古学研究所	本村克保	弥生時代遺構・土坑古墳時代前期井戸		15
第18次	磯城郡田原本市多668-1	1988年9月28日～11月2日	多神社河原の建て替え	151	田原本市教育委員会	清水球哉	近世の多神社本殿		16
第19次	磯城郡田原本市宮森62-1西側水路	1989年2月23日～4月9日	水路改修工事	120	橿原考古学研究所	小栗明彦	弥生時代の遺構・土坑、古墳時代前期の壙穴住居		
第20次	磯城郡田原本市多189-2,190-2	2001年9月18日～9月25日	携帯電話無線基地局の建設	50	田原本市教育委員会	清水球哉	古墳時代の溝・土坑		
第21次	磯城郡田原本市多609西側水路	2003年2月14日～2月21日	水路改修工事	87	田原本市教育委員会	清水球哉	中世の河川跡、近世の井戸・溝		
第22次	磯城郡田原本市多	2010年1月13日～3月20日	水路改修工事	280	田原本市教育委員会	清水球哉 大谷博則	弥生時代の遺構・溝・土坑・埴輪跡、中世大溝		

から秦楽寺にかけての地域に集落がその中心を変えつつ展開していたようである。

第4節 多氏と多坐弥志理都比古神社の歴史

多遺跡のほぼ中央、飛鳥川東岸には「多坐弥志理都比古神社」(以下、多神社)がある。多の地は『古事記』の編集で知られる太安万侶らを出した多氏の本貫地で、そこに鎮座する多神社は多氏と密接な関係をもっている。なお、宮司家は近世に植田姓を名乗っていた



第5図 多神社境内配置図 (S=1/1,000)

ものの、現在は「多」姓を名乗っている。

『日本書紀』によると、多氏の祖は神武天皇の継嗣と目されていた神八井耳命で、弟の綏靖天皇に二代目の皇位を譲り、自らは神祇を奉典する立場となったという。多氏の出身者としては壬申の乱で活躍した多品治（?～696）、その子ともいわれる太安万侶（?～723）が著名である。

多神社は、現在本殿4棟に神武天皇・神八井耳命・綏靖天皇・玉依姫命の4柱を祀っている。延喜式では二座と記され、二座とも「名神大」と位置づけられる。和田萃氏は水を司る「ミシリツヒコ」・「ミシリツヒメ」の2座であった可能性を指摘しており⁽¹⁰⁾、自然神への祭祀⁽⁵⁾から多氏の祖先神を祀る形に変容していったものであろうか。

多神社は、大同元年（806）に正三位の位階を授かり、60戸の神戸を得ていた。後の貞観元年（859）、同じ式内大社である鏡作神社・村屋神社・池神社が従五位上の神位を与えられたのに対し（「三代実録」）、奈良盆地において高い位階を得ていたことがわかる。

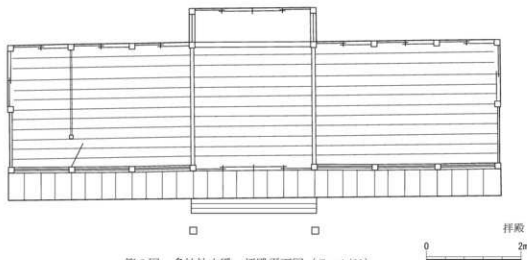
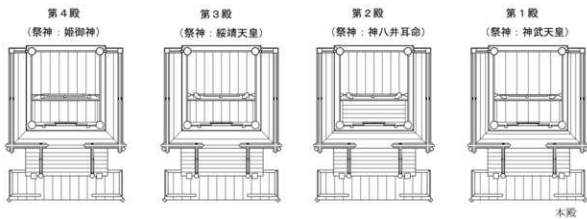
中世の多神社は、奈良盆地南部で勢力を伸ばした十市氏と強い関係をもった。多神社の祭祀も十市氏が中心となって支えられたとみられる。磯城郡誌によると、神社には「十市遠忠自筆祈雨の短冊、天文二十一年十市遠勝田園寄付状等を蔵す」とあるが、田原本町史では「既に散逸して見ることができない」としている⁽⁶⁾。いずれにしても、多神社と十市氏との関わりの深さが窺われる。この時期、大和における多くの大社が一時衰退しているが、多神社は十市氏の保護もあり大幅な退転は免れたようである。また、十市氏の衰退後となるが、天正二十年（1592）から慶長二年（1597）にかけて社殿の造営がおこなわれた記録が残る。なお、天正二年（1574）の「多神宮観音下地田数帳」に「神宮寺」「観音堂」がみえる。神宮寺については詳細不明だが、観音堂は平安時代後期の十一面観音立像を本尊とし、多神社の東側100mに現存する。鬼瓦に寛文三年（1663）と宝永六年（1709）の年号が記される近世の建築であったが、1998年の台風7号で損壊したため、近年新築されている。

近世になると、文献記録では詳細は伝わっていないものの、18世紀中葉に社殿の大規模な造営がおこなわれたことが本殿棟木の墨書や拝殿鬼瓦に刻まれた年号から判明している。神主植田家では、この時期に養子を吉田氏へ入門させて長門守名を受領している。

近代以降は、廃仏毀釈により明治5年までに神宮寺が廃寺処分となり、観音堂のみが辛うじて残った。その後、多尋常小学校に多神社地が供されたり、古事記撰上1230年を記念して太安万侶を祭神とする小社神社が整備されるなどした。多神社自体は旧十市郡で最も格式の高い神社として地元の崇敬を集め、現在も宮司多氏や地元氏子衆により祭祀が維持されている。

第5節 多坐弥志理都比古神社の概要

多神社は、南北200m、東西100mの境内地をもつ（第5図）。本殿の北側には社叢が拡がり、南西部には社務所等がある。神社の東側約500mの寺川沿いに鳥居があるが、神社北側700m、西側600m、南側500mの地点にもそれぞれ字トリエ等の地名があり、か



第6図 多神社本殿・拝殿平面図 (S=1/80)

つては四方に鳥居が置かれていたようである。また、周囲には摂社・末社が点在する。東側の姫皇子命神社、南側の小杜神及び社皇子神社、西側の屋就神社などがある（第3図下）。

現在の多神社は、本殿と拝殿、社務所などからなる。本殿は平成8年度に県指定文化財（建築物）に指定されている。本殿は4棟が東西に並ぶ形で（第6図上）、それぞれが1間×1間の春日造である。東から神武天皇、神八井耳命（綏靖天皇の兄で多氏の祖）、神淳名川耳命（綏靖天皇）、姫御神（玉依姫）の4柱を祀る。先述のように、延喜式では2座とあり、平安末期の「多神社注進状」には水知律彦大神、日知律姫大神であると解されている。田原本町史では和田萃氏により「弥志理都比古」「弥志理都比売」（その名から治水神と解されている）の2柱を祀っていた可能性が考えられている⁽⁴⁾。大和岩雄氏も「ミシリツヒコ」「ミシリツヒメ」の二柱と解釈しているが、ミシリツヒコのミを「水」ではなく「御」とし、政治権を司った綏靖天皇との対比で、神八井耳命が祭祀権を司ったことを示すものであると解釈している⁽⁵⁾。

いずれにしても、平安時代末期までは二柱の祭神であったものが、いつしか四柱という形が定まっていっていったと考えられる。

第6節 多坐弥志理都比古神社の拝殿建築について

今回の発掘調査は、多神社拝殿の建て替えに伴うものであった。調査前に解体された拝殿（第6図下、第7図）は、鬼瓦の銘により宝暦年間の建築である可能性が考えられる。また、向拝は近世後期から幕末にかけて後付けされた可能性があった。しかし、残念ながら旧拝殿についての解体前の調査はおこなっていなかったため、木組み等の構造の詳細を知ることはできない。その中で、宮司の多忠記氏が鬼瓦のほぼ全てを保存していたこと、解体前に鬼瓦の写真を一通り撮影していたことで、拝殿の屋根に載っていた鬼瓦の配置を復元することができた（第8図）。

拝殿は東西に大棟が通る入母屋造りで、南側中央に向拝がつく形である。向拝部分は切妻となっていた。東西の大棟の両端に年号と製作者銘の入った大棟鬼が置かれ、向拝正面の棟瓦に龍を立体的に表現した棟先飾瓦を用いていた。東西大棟の鬼瓦は、西側が阿形（第8図1）、東側が吽形（第8図2）で、「宝暦九巳卯歳 三月吉日」「瓦工新口村 樋屋傳兵衛」の銘があった。なお、2については地鎮のため拝殿新築の際に埋納したとのことである。一方、龍を立体的に表現した向拝正面の棟先飾瓦（第8図3）は、無銘であり年号は明らかでない。ただし、十市御県坐神社拝殿の同様の瓦に天明年間の銘がみられたことから、その前後の時期に造られた可能性がある。

これ以外の稚児棟や降棟を飾る鬼瓦には、「田瓦平」の押印をもつ鬼瓦が3点（第9図4・6・7）みられるほかは、古相を呈する鬼瓦や比較的新しい縁起物を配した棟先飾瓦などが混在して使用されていた。宮司の話では、室戸台風による被害で拝殿北東部が破損し、瓦を葺きなおしたとのことで、この際に瓦の入れ替えがおこなわれている模様である。特に、拝殿の裏側となる北側屋根が当初の本瓦葺きから棧瓦葺きに改められたとのことで、1点みられる昭和期の棟先飾瓦（第10図15）はこの時入れ替えられたものであろう。また、打出小槌（第10図14）及び菊花（第11図16）の棟先飾瓦が各1点含まれるが、民家等で使用されるタイプであり、近隣の廃屋等から流用した可能性がある。一方、「田瓦平」銘の鬼瓦3点は、様式から近世後半～末頃のものと思われる。向拝が後付けである可能性が高いことから、このときに龍の棟先飾瓦とセットで追加されたものである可能性も考えられる。拝殿前におかれた和泉砂岩製狛犬が天明期の寄進であり、その前後に拝殿向拝の追加がおこなわれたのかもしれない。

この拝殿の解体からまもなく、台風7号により破損した観音堂の建て替えもおこなわれた。このとき、旧堂に葺かれていた鬼瓦のうち3点が床下に保管された。寛文年間のもの1点（第14図1）、宝永年間のもの2点（第14図2が吽形、他に阿形あり）であり、建築年代を考える上で参考となろう。

【註】

- (1) 参考文献1
- (2) 参考文献2

(3) 参考文献 3

(4) 和田萃『田原本町史 本文編』『歴史編 古代 第二章 古代の田原本』1986 p.112

(5) 多神社の立地をみると、真南に畝傍山が、真東に三輪山がそびえる。また、二上山も真西からやや北寄りに位置する。畝傍山は神武天皇の陵がつけられたとされる場所であり、三輪山は古代から信仰の対象となった山である。多神社の立地にはこれらの山の位置が大きく関係している可能性が高い。なお、大和岩雄氏からは「日読み」に関わる聖地だったとの指摘がなされている。多氏の祖神八井耳命が弟綏靖天皇に皇位を譲って祭祀を預かる立場を選んだという古事記の記述は、このような立地にある多神社の役割が極めて重かったことを反映しているのであろうか。(大和岩雄「多神社—古代王権の「マツリゴト」の原点と多氏」『神社と古代王権祭祀』1989)

(6) 吉田栄治郎『田原本町史 本文編』『社寺編 第一章 神社』1986 p.581 他

【参考文献】

1. 石野博信 1973 「大和の弥生時代」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷 第2冊』
2. 寺沢薫 1978 「大和弥生社会の展開とその特質」『橿原考古学研究所論集 6』
3. 前沢郁浩 1994 「多遺跡の検討」『みずほ 第13号』大和弥生文化の会
4. 田原本町史編さん委員会 1986 『田原本町史 本文編』
5. 佐伯有清 1962 『新撰姓氏録の研究 本文編』吉川弘文館
6. 坂本太郎・平野邦雄 監修 1990 『日本古代氏族人名辞典』吉川弘文館
7. 奈良県磯城郡役所 1915 (復刻: 明治文庫 1973) 『奈良県磯城郡誌』
8. 川上洋一 2003 「多遺跡の検討2」『みずほ 第38号』

多遺跡関連文献一覧

・発掘調査に関するもの

9. 安井良三 1977 「多神社境内遺物包含地 (A地点) 調査報告」『同志社大学博物館年報』9
10. 河上邦彦 1978 「多遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1977年度』奈良県立橿原考古学研究所
11. 河上邦彦 1979 「多遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1978年度』奈良県立橿原考古学研究所
12. 藤井利章 1982 「多遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1980年度』(第一分冊) 奈良県立橿原考古学研究所
13. 藤井利章 1983 「多遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1981年度』(第一分冊) 奈良県立橿原考古学研究所
14. 藤井利章 1983 「多遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1982年度』(第一分冊) 奈良県立橿原考古学研究所
15. 関川尚功 1984 「多遺跡第6次発掘調査概要報告」『奈良県遺跡調査概報 1983年度』(第二分冊) 奈良県立橿原考古学研究所
16. 藤田三郎 1985 『多遺跡発掘調査報告—第7・8次調査—』田原本町文化財調査報告書第1集 田原本町教育委員会

17. 佐々木好直 1985 「多遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984 年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
18. 寺沢薫 1989 「多遺跡第 10 次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1986 年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
19. 寺沢薫 1986 「多遺跡第 11 次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1985 年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
20. 杉山秀宏 1989 「多遺跡第 12 次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1988 年度』（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所
21. 見須俊介 1995 「多遺跡第 13 次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1995 年度』（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所
22. 清水琢哉 1998 「多新堂遺跡第 2 次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報 7 1997 年度』田原本町教育委員会
23. 本村充保 1998 「多遺跡第 16 次・第 17 次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1997 年度』（第 1 分冊）奈良県立橿原考古学研究所
24. 本村充保 2004 『磯城郡田原本町多遺跡第 16 次・第 17 次発掘調査報告書』
(奈良県文化財報告書 第 107 集) 奈良県立橿原考古学研究所
25. 清水琢哉 1999 「多遺跡第 18 次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報 8 1998 年度』田原本町教育委員会
26. 豆谷和之 2000 『矢部南遺跡発掘調査報告書-第 1・2 次調査-』田原本町文化財調査報告書第 2 田原本町教育委員会
27. 小栗明彦 2003 「多遺跡第 19 次調査成果と環境について」『みずほ 第 38 号』大和弥生文化の会
28. 清水琢哉 2002 「多遺跡第 20 次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報 11』田原本町教育委員会
29. 清水琢哉 2003 「多遺跡第 21 次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報 12』田原本町教育委員会
30. 清水琢哉 2004 「多大垣遺跡第 2 次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報 13』田原本町教育委員会
31. 清水琢哉 2011 「多遺跡第 22 次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報 19 2009 年度』田原本町教育委員会

・その他

32. 大和弥生文化の会 1995 『大和の弥生遺跡 基礎資料 I』
33. 河森一浩・藤田三郎 2009 「矢部団栗山古墳出土の須恵器」『田原本町文化財調査年報 17 2007 年度』田原本町教育委員会
34. 川上洋一 2003 「多遺跡の検討(2)」『みずほ 第 38 号』大和弥生文化の会



旧拝殿（南から）

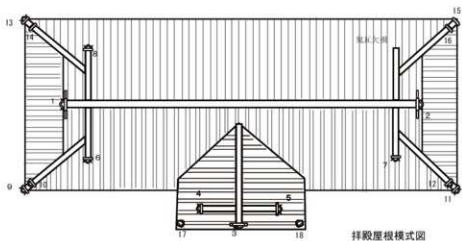


旧拝殿（西から）



旧拝殿向拝部（南から 拡大）

第7図 旧拝殿写真



拜殿屋根模式図



1. 大棟西側 宝曆九年銘 阿形鬼瓦



2. 大棟東側 宝曆九年銘 吽形鬼瓦



3. 向押棟先飾瓦 (龍)



北側の棧瓦軒先部

第8図 旧拝殿棟端飾り瓦 (1)



4. 「田瓦平」銘押印 吽形鬼瓦 (耳付き)



5. 向拝東降棟鬼



6. 「田瓦平」銘押印 阿形鬼瓦



7. 「田瓦平」銘押印 吽形鬼瓦



8. 北西降棟鬼



9. 南西稚児鬼

第9図 旧拝殿棟端飾り瓦 (2)



10. 南西二の鬼



11. 南東稚児鬼



12. 南東二の鬼



13. 北西稚児鬼



14. 北西二の鬼 (小礎)



15. 北東稚児鬼 (昭和期?家紋嵌め込み式)

第10図 旧拝殿棟端飾り瓦(3)



16. 北東二の鬼(菊)



17. 向拝西 獅子「金瓦拵」刻書



18. 向拝東 獅子「田瓦平」押印



北東部降り棟先端の鬼瓦欠失部

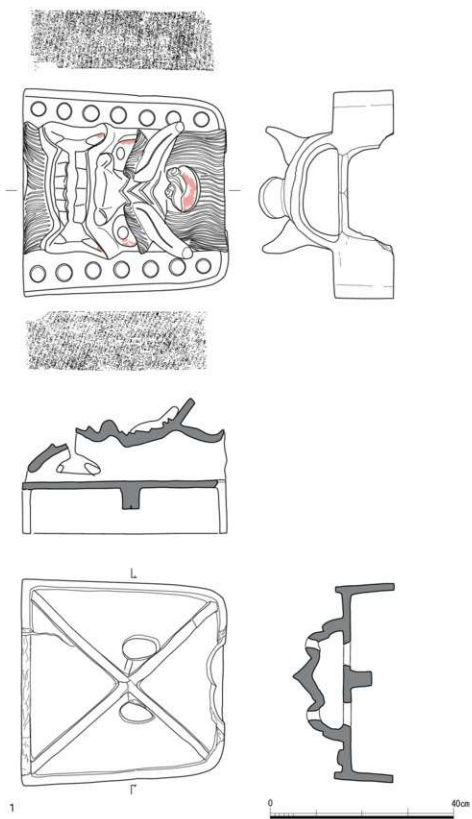


大棟の道具瓦使用状況(南から)

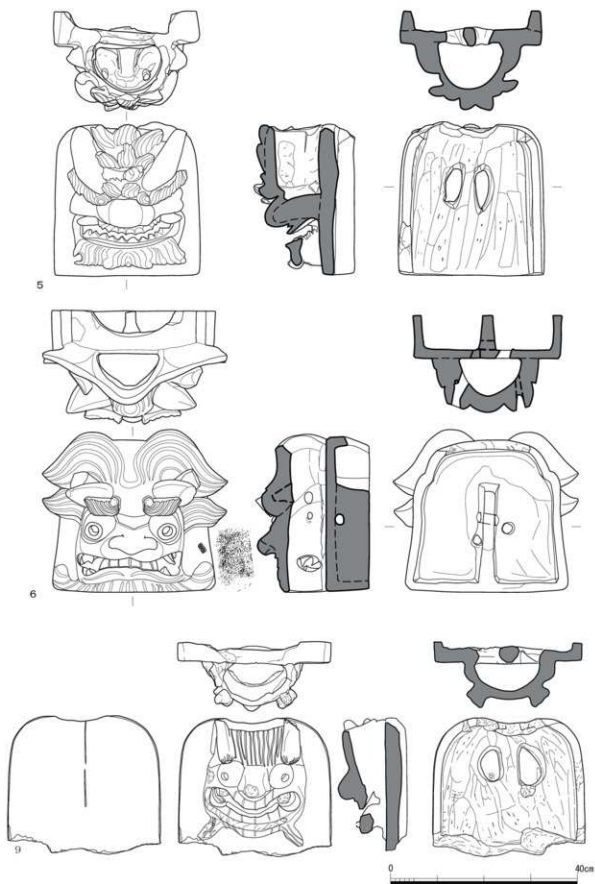


向拝部の道具瓦使用状況(西から)

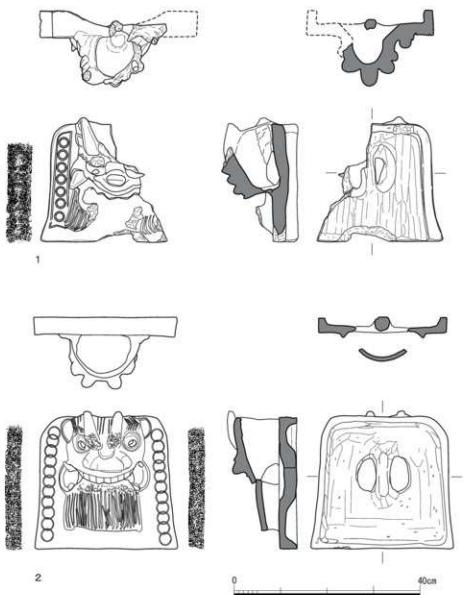
第11図 旧拝殿棟端飾り瓦(4)



第12图 多神社田押殿鬼瓦1 (S = 1/8)



第13図 多神社田拝殿鬼瓦2 (S=1/8、拓本はS=1/4)



第14図 旧多観音堂鬼瓦 (S=1/8)

第Ⅱ章 発掘調査の成果

第1節 調査の契機と過程

今回報告する多遺跡第18次調査は、多遺跡の中央に位置する多坐弥志理都比古神社（多神社）の拝殿建替工事に先立って、田原本町教育委員会文化財保存課がおこなったものである。

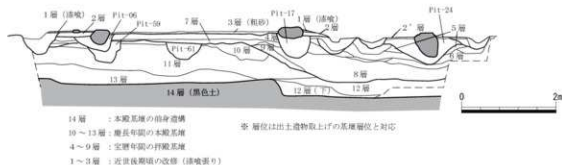
多神社旧拝殿は、鬼瓦銘から宝暦九年（1759）頃の建築であることが知られていた。本殿四棟については、江戸時代中期の建築当初の姿をよく残す神社建築として、平成8年3月に県指定文化財となった。しかし、拝殿は後世の改変が著しいため指定には至らなかった。拝殿は老朽化が激しく、早急な修理または改築が必要であったが、費用的な問題や今後の管理面の問題などから、平成10年度に解体撤去し、新たに建て替えることとなった。

拝殿の建て替えにあたっては、周知の遺跡（多遺跡）内であること、拝殿自体が近世中期の貴重な文化財であることから事前の届出に基づいて神社側と町・県の文化財保護部局とで協議をおこなった。その結果、工事により消滅する近世拝殿基壇部分について田原本町教育委員会が埋蔵文化財発掘調査をおこなうこととなった。

拝殿は、調査に入る直前に解体された。礎石・漆喰等がそのまま残されており、重機による掘削はおこなわず、直接人力での調査に入った。

調査日誌抄 平成10年9月～11月

9月24日	9月22日の台風7号の影響により、周囲に折れた枝や葉が散乱する。神社本殿も被害あり。本日午後から座標移動と杭打ち、現状の平面図作成。既に拝殿は解体済、基壇掘の延べ石も除去されていた。礎石のうち2つは解体の際に若干動いている模様。	10月12日	礎石をはずす。礎石設置時の柱～13日	穴と栗石の検出、基壇掘の栗石はずし。
9月25日	平面図作成（つづき）。	10月14日	実測作業（柱穴の栗石など）。	～16日
9月28日	本日より作業員参加。解体時の攪乱層の除去。	10月19日	柱穴断ち割り、実測。下層遺構の～20日	柱穴が一部重複して検出される。
9月29日	近世末段階の全景。その後漆喰をはずす作業。漆喰下から瓦列検出。	10月22日	近世後半段階完掘の全景写真。	
9月30日	基壇掘の延べ石を設置した際の栗石～10月5日	10月23日	遺構面ならびに基壇南側の掘り下～28日	げ、第2遺構面の柱穴検出。
10月6日	延べ石の栗石検出状況の全景写真。	10月29日	近世前半段階検出の全景写真、柱穴の栗石断ち割り。	
10月7日	延べ石の栗石平面図作成。	10月30日	柱穴完掘、全景写真。	
		10月31日	基壇の断ち割り、セクション図作成。	
		11月2日	断ち割り（つづき）、片付け、撤収。	



第15図 基壇築造過程の概念図

第2節 調査の成果

1. 層序

今回の調査は現存した建物を対象とした調査であったため、最上層に薄い暗灰褐色土の堆積層があったほかは、すべて基壇形成に関わる人工的な造成土であった（第23図参照）。

- | | | |
|-----------------------|--------|--------------------|
| I. 暗灰褐色土（青みがかる） | 0.04 m | 現代の堆積土 |
| II. 灰白色粗砂 | 0.06 m | 近世後半基壇上層土（第15図 3層） |
| III. 暗褐色土 | 0.08 m | 近世後半基壇造成土（同 4層） |
| IV. 褐灰色粘質土と黄灰色細砂の互層 | 0.63 m | 近世前半基壇造成土（同 11層） |
| V. 褐灰色粘質土 | 0.3 m | 中世基壇造成土？（同 13層） |
| VI. 黒褐色土（土器片を多く含む） | 0.45 m | 造成土か？ |
| VII. 暗灰褐色土（土器細片を多く含む） | 0.2 m | 奈良～平安ごろの包含層？ |
| VIII. 暗褐色砂質土（しまった土） | 0.06 m | 同上？ |
| IX. 灰黒色粘質土（青みがかる） | 0.55 m | 奈良時代ごろの遺構埋土 |
| X. 暗黄褐色シルト（やや粘質） | | 旧河道の堆積？ |

第II～V層までが基壇造成土で、第VI層も造成土の可能性がある。第VII層には古代ごろとみられる須恵質の瓦等が含まれていた。また、第IX層からは奈良時代頃の須恵器杯、平安時代頃の土師器杯などが出土している。第IX層が遺構であることはほぼ確実であるが、第VII～VIII層も遺構埋土であるとすれば、出土した瓦の時期より奈良～平安時代頃と考えられる。

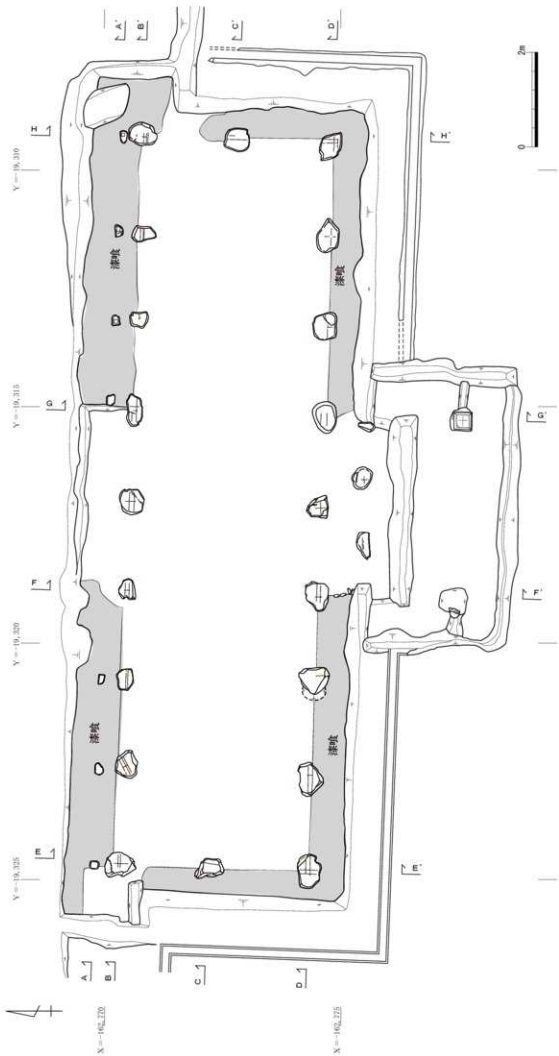
なお、古代の遺構面とみられる第IX層上面は、標高51.3m前後となる。北側でおこなわれた第19次調査の遺構面が標高51.2m前後であり、大きな差異は認められない。

面的な調査は、第IV層上面の近世前半の基壇面までおこなった。それ以下は、中世の基壇の状況や築造課程を断ち割りの層序観察により調査した。

2. 遺構

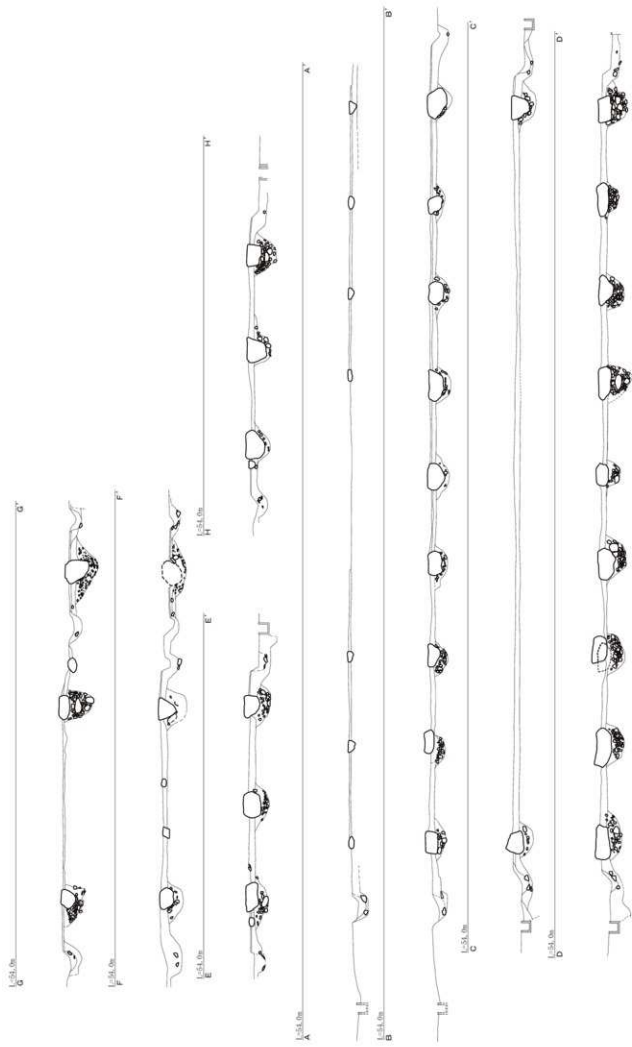
(1) 近世後半の遺構

SB-01 調査に先立って解体された拝殿である。東西17.2m、南北6.2m、高さ0.2mの基壇上に建てられていた。建物は東西8間、南北2間で、主柱間の規模は東西15.5m、南北4mである。建物北側には縁がつく。また、南側中央では2間分の幅で向拝が張り出

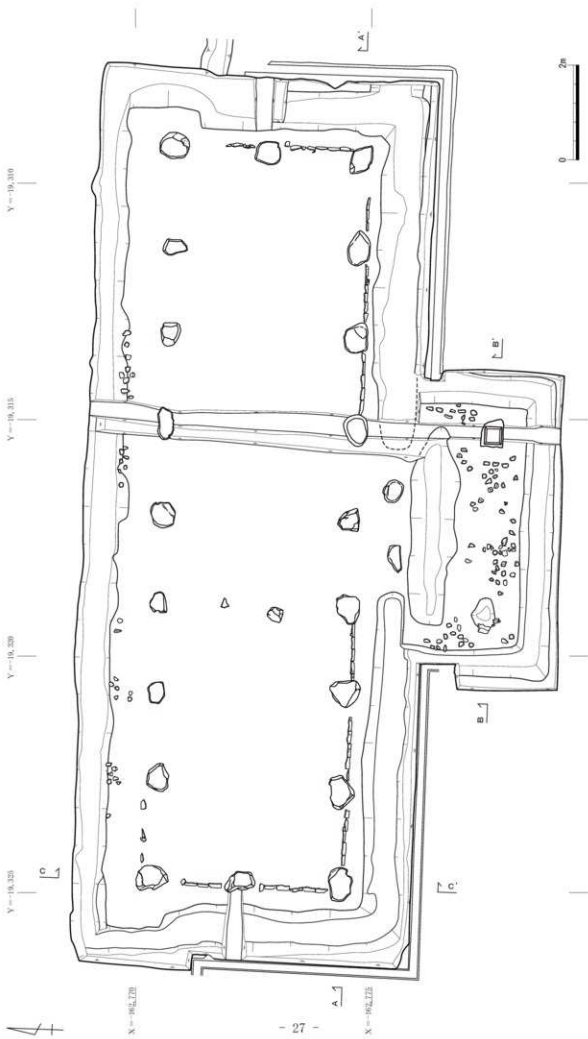


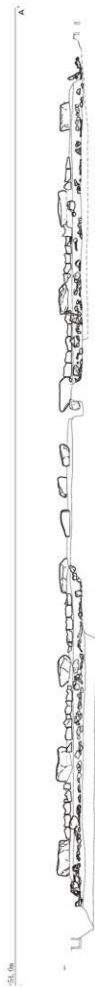
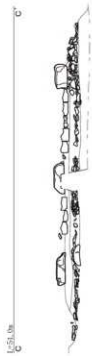
X=162,720

X=162,725



第16图 S-B-01 遺構実測図 (近代以降) (S=1/80)





第17圖 S B-01遺構実測図(近世後半)(S=1/80)

している。

S B -01の支柱を支える礎石は、向拝を支える礎石2基を含めて22基で構成される。20基の支柱礎石(Pit-01～Pit-20)は、直径0.6～1.0m、深さ0.3～0.5mの柱穴を掘削し、そこに拳大～人頭大の礫を充填した上に設置されている。

南側柱列から2.9mで向拝柱の礎石が据えられている(Pit-23・Pit-24)。径1.1～1.2m、深さ0.25～0.5mの柱穴を掘削し、2～3cm程度の礫を混和させた土で礎石の据え付けをおこなっている。礎石は、上面に正方形の段を削りだしたものが使われていた。このうち、東側の礎石には、側面に柱を受ける円形の穴が彫り込まれていた。

22基の礎石上面には、目通しに使われた墨線が残る。北側礎石列・南側礎石列ともに東西方向の墨線が2～3本ある。

北側の縁柱を支える礎石は、北側柱列の各柱から0.4m北に15～20cm程度の礎石を据えている。また、南側の縁柱を支える礎石は、建物中央、南側支柱列から南へ0.9mの所に長軸0.5m、短軸0.3m前後のものが二基みられる。南側の縁柱は基本的に基壇の延べ石に直接置かれていたが、向拝部分の延べ石がない箇所に礎石を設置したものであろう。

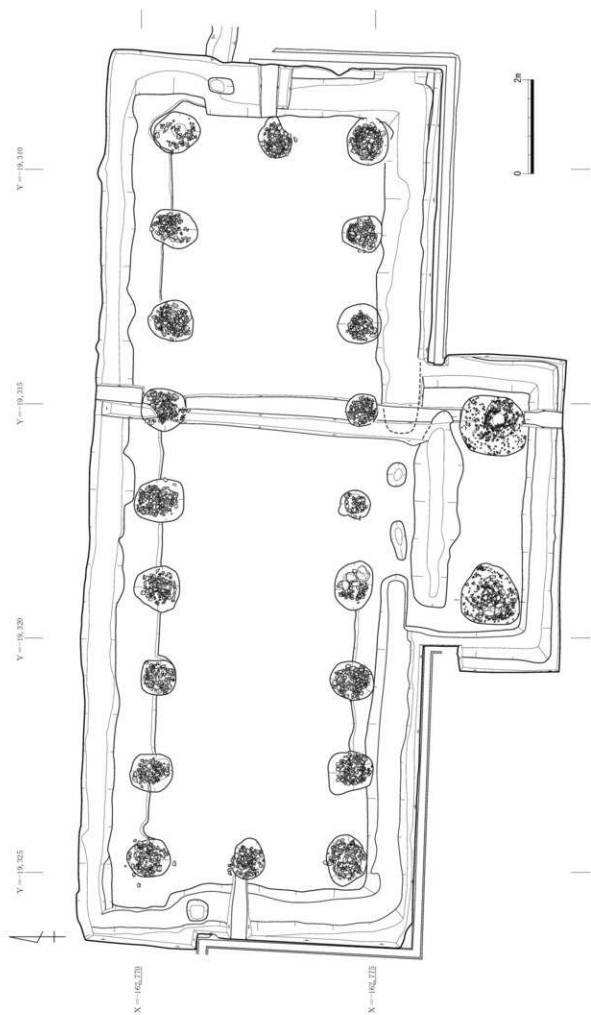
(2) 近世初頭の遺構

S B -51～54 現存していた拝殿の基壇下から検出された4棟の建物遺構である。1間×1間の建物が4棟東西に並んでいた。現基壇とのレベル差は約0.2mであるが、前庭部となる南側部分は現地表面から約1m下がる。建物の構造は、1間×1間の支柱と、大床を支える縁東柱の柱穴または礎石から成る。支柱穴の礎石はすべて残存しておらず、次段階の建物に再利用された可能性が高い。柱穴は長軸0.8m、短軸0.6m前後の楕円形で、前拝殿(S B -01)と同様に拳大の礫を充填して地盤を強化していた。淡褐色のチャートを中心とする礫構成で、S B -01の柱穴に充填されていた礫とは異なっている。

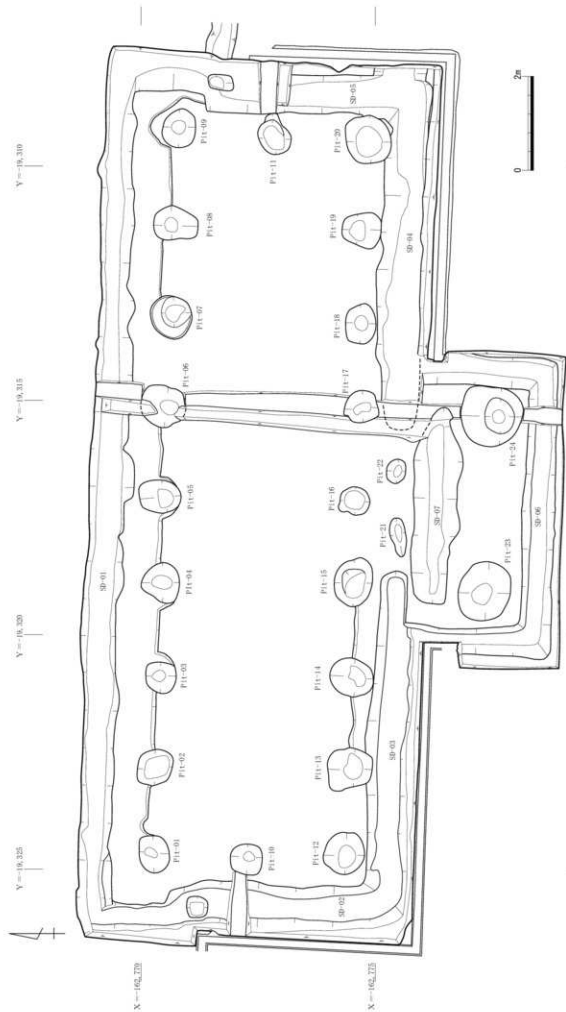
縁東柱の礎石は、大半が失われていた。本来礎石が存在したとみられる位置でも、痕跡が残っていない例が多い。縁東柱礎石の設置が基本的には簡易におこなわれていたこと、次段階建物を建てるにあたり礎石の多くが引き抜かれたことも1つの原因であろう。さらに、本来は南側に向拝柱の礎石が2基存在していたと考えられるが、既に失われているため確認できなかった。

S B -51 西端の建物跡である。支柱穴4基、建物南東コーナーの縁東柱の礎石3基、建物西側の縁東柱礎石1基が検出されている。建物西側は、近世末～近代の拝殿基壇掘石設置工事で削平を受けており、縁東柱列の多くが失われたとみられる。支柱穴の芯間での規模は、東西2.1m、南北1.7mである。南側縁東柱の礎石は、南側支柱穴の芯から0.7m南側にある。

S B -52 西側から2番目の建物跡である。支柱穴4基、建物西側・東側の縁東柱穴各2、南側縁東柱の礎石3基が検出されている。支柱穴の芯間での規模は、東西2.2m、南北1.7mである。また、東西の縁東柱穴を含めると東西3.6mをはかる。また、南側縁東柱の礎石は南側の支柱穴の芯から0.7m南側にある。西側縁東柱の柱穴の1つには、礎石の根石の可能性のある礫1点が残されていた。建物南側の縁東柱礎石は、東端のもので長軸0.5



第 18 图 S B-01 礁石墓达石龛出状况实测图 (S = 1/80)



第 19 圖 S B-01 柱穴完備狀況其測圖 (S = 1/80)

m、短軸0.4mを測る。最も小さい西から2番目のもので長軸0.4m、短軸0.2mを測る。
SB-53 東から2番目の建物跡である。支柱穴4基、建物西側の縁東柱穴2基、東側の縁東柱穴1基、南側の縁東柱穴1基が検出されている。支柱穴の芯間での規模は、東西2.1m、南北1.7mである。縁東柱を含めると、東西3.5mとなる。また、南側縁東柱の礎石は南側の支柱穴の芯から0.7m南側にある。

SB-54 東端の建物跡である。検出された支柱穴は3基で、南東隅の支柱穴は調査区外となる。また、北東の支柱穴は、近世末～近代頃の拝殿基壇掘り設置工事時に上面を削られている。縁東柱は、建物西側で柱穴2基を検出した。建物の南側では検出できなかった。また、東側は調査区外となるため不明である。支柱穴の芯間での規模は、東西2.2m、南北1.6mである。西側縁東柱穴は西側支柱穴の芯から0.7m西側にある。

4棟の乗る基壇は、褐灰色粘質土と黄灰色細砂の互層により造成される。中世頃の基壇から約0.6mの盛土がおこなわれていた。南側中央はやや張り出した形となり、その先に



第20図 調査風景

は凝灰岩でつくられた階段の最下段が残存していた。なお、基壇と階段下部との比高差は約0.8 mである。

4棟の配置であるが、SB-52・53はほぼ南北に軸をとっているが、SB-51はやや北北東-南南西寄りに傾き、SB-54は若干北北西-南南東寄りに傾く。両端の本殿をやや外側に傾けて建てることで、視覚的な効果を狙った可能性がある。

第2表 SB-51～54主軸一覧

	SB-51	SB-52	SB-53	SB-54
座標北からの傾き	東へ約2° 40'	東へ約0° 30'	東へ約0° 30'	東へ約1° 30'

(3) 近世以前の遺構

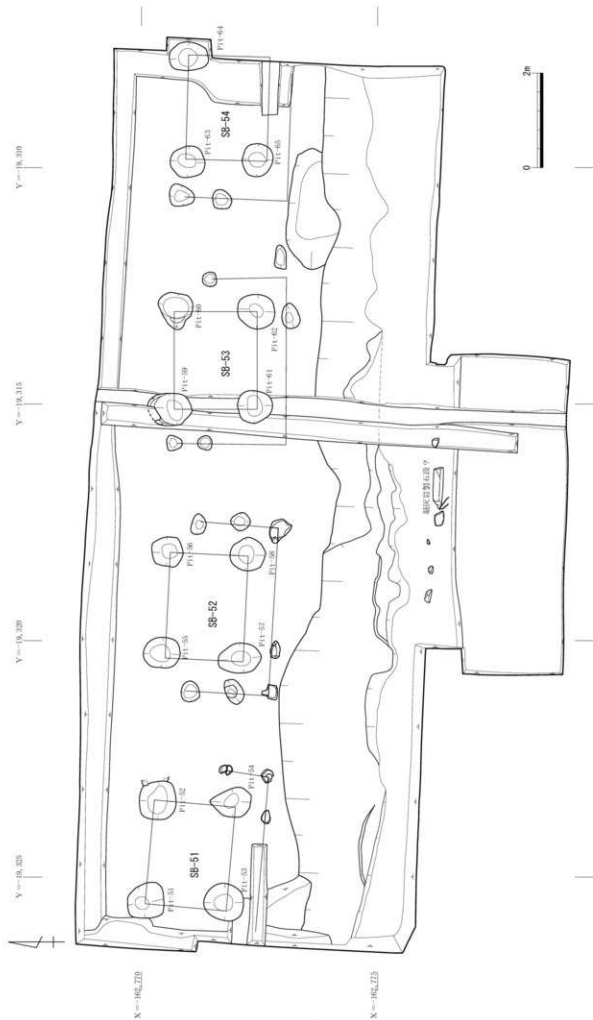
基壇の4ヶ所に断ち割りを入れて層序の確認をおこなった。その結果、断片的ではあるが、中世の基壇の存在を確認することができた。

断ち割りBと断ち割りDでは、基盤層上に厚さ0.4 mの黒褐色粘質土層がみられた。しかし、その中間にある断ち割りCでは、黒褐色粘質土層が薄く、B・Dでも南端では黒褐色粘質土層は0.02 m未満と薄くなっていた。このことから、B・Dは南端とその中間地点より一段高かったことが考えられる。Dでは黒褐色粘質土上面に拳大の石が置かれており、面的構造は明らかでないものの、建物基壇の可能性をもつ土盛り遺構であると考えられる。なお、この遺構の時期であるが、盛土中の遺物の多くは弥生土器であり、周囲の弥生時代の遺構からの混入であることは明らかである。この黒褐色土の下に広がる灰黒色粘質土層から出土した遺物に11世紀前半までの土師器小皿がみられることから、黒褐色粘質土層の形成は少なくとも11世紀以降であると考えられる。

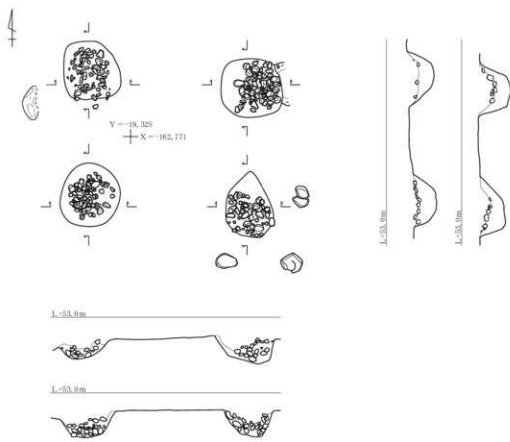
第3表 柱穴一覧

SB-01					SB-51				
柱穴番号	南北 (m)	東西 (m)	深さ (m)	備考	柱穴番号	南北 (m)	東西 (m)	深さ (m)	備考
Pit-01	0.64	0.80	0.29		Pit-51	0.78	0.66	0.36	
Pit-02	0.72	0.77	0.27		Pit-52	0.78	0.81	0.37	
Pit-03	0.65	0.68	0.31		Pit-53	0.84	0.80	0.43	
Pit-04	0.82	0.84	0.21		Pit-54	0.86	0.64	0.34	
Pit-05	0.90	0.72	0.20						
Pit-06	0.91	0.89	0.27		SB-52				
Pit-07	0.89	0.92	0.23		柱穴番号	南北 (m)	東西 (m)	深さ (m)	備考
Pit-08	0.94	0.74	0.14		Pit-55	0.76	0.64	0.40	
Pit-09	0.70	0.83	0.26		Pit-56	0.60	0.60	0.35	
Pit-10	0.68	0.64	0.28		Pit-57	0.92	0.64	0.31	
Pit-11	0.72	0.88	0.32		Pit-58	0.64	0.71	0.37	
Pit-12	0.88	0.90	0.35		SB-53				
Pit-13	0.96	0.88	0.37		柱穴番号	南北 (m)	東西 (m)	深さ (m)	備考
Pit-14	0.92	0.83	0.39		Pit-59	0.80	0.66	0.40	
Pit-15	0.80	1.03	0.46		Pit-60	0.74	0.55	0.39	
Pit-16	0.64	0.60	0.28		Pit-61	0.74	0.68	0.30	
Pit-17	0.71	0.66	0.49		Pit-62	0.78	0.73	0.42	
Pit-18	0.65	0.87	0.36		SB-54				
Pit-19	0.83	0.78	0.26		柱穴番号	南北 (m)	東西 (m)	深さ (m)	備考
Pit-20	0.96	1.00	0.41		Pit-63	0.70	0.65	0.27	
Pit-23	1.38	1.25	0.46	埋土は4cm以下の小礫を中心とする。	Pit-64	0.84	0.60	(0.22)	第一号設置時に上面0.1m前後削平。
Pit-24	1.22	1.28	0.26	同上。	Pit-65	0.64	0.70	0.31	

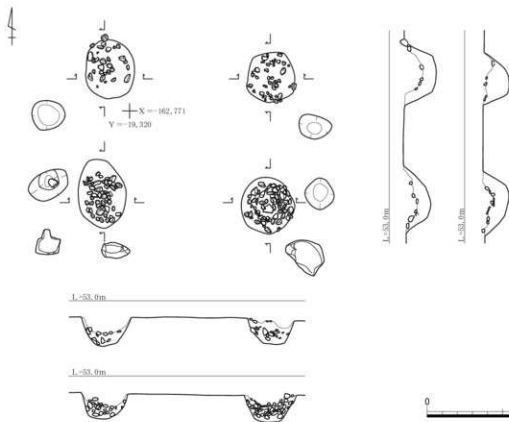
※Pit-66は調査区外。



第21图 SB-51~54 平面状况实测图 (S=1/80)



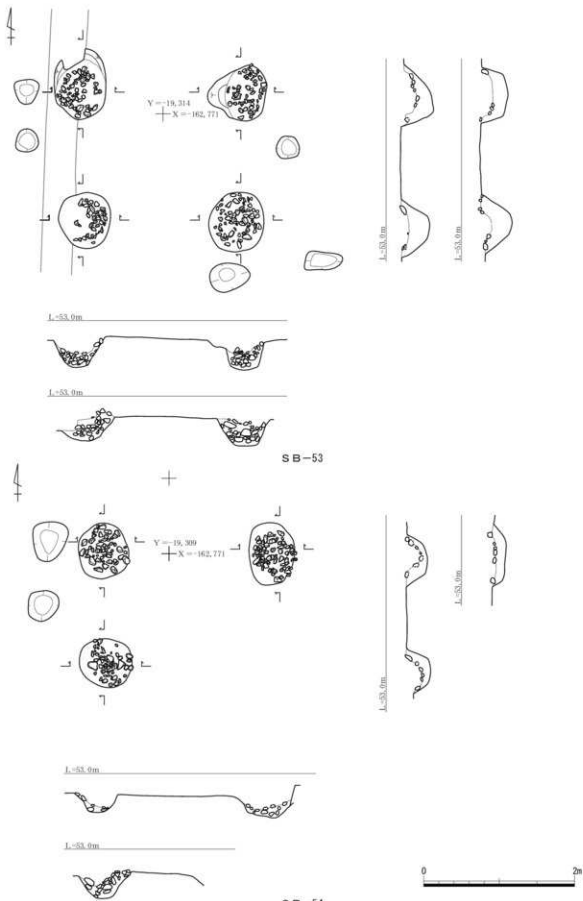
SB-51



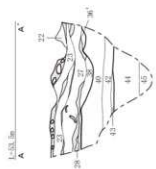
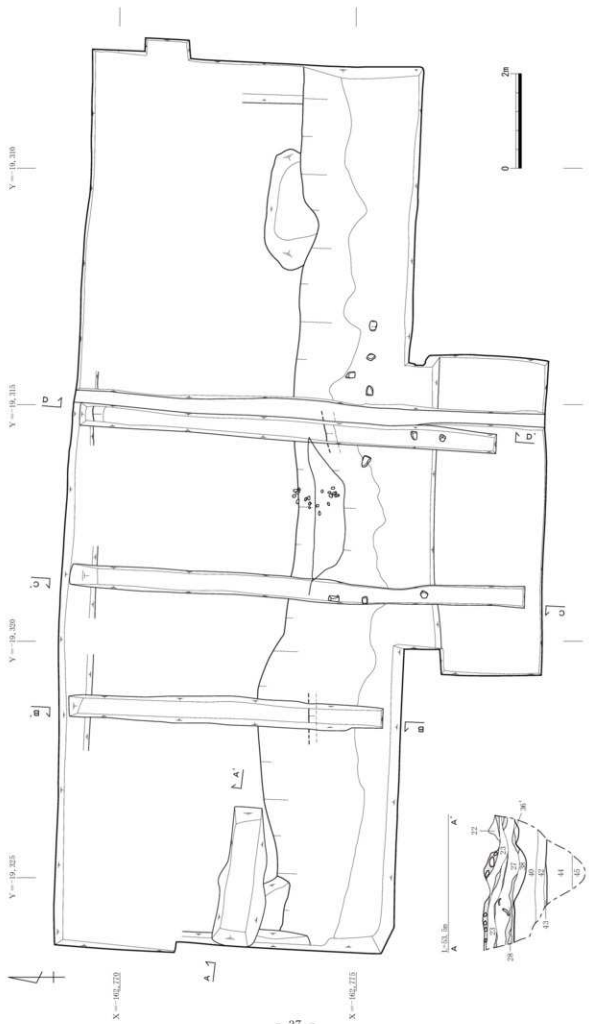
SB-52

第22图 SB-51·52碇石裏込石検出状況実測図 (S=1/50)

0 2m



第23图 SB-53·54碇石裏込石検出状況実測図 (S=1/50)



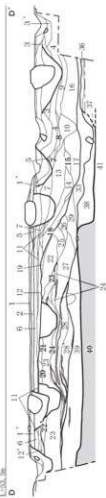
1:50.0m



1:50.0m



1:50.0m



1. 黒褐色土
 1'. 暗褐色土
 2. 灰白色細砂 (化粧ノ砂) 近代表層
 3. 灰白色粘砂 (粘砂質)
 3'. 暗粘質土
 4. 灰褐色粘砂
 5. 褐色粘砂
 6. 黒褐色粘質土 (砂質強い)
 7. 暗褐色粘質土 (砂質強い)
 7'. 暗褐色粘質土 (砂質強い)
 8. 暗褐色粘質土 (粘砂質)
 9. 暗褐色粘質土 (粘砂質)
 10. 灰褐色粘砂

11. 灰白色粘砂
 12. 暗褐色粘砂 (粘質土に近い)
 12'. 暗褐色粘質土
 13. 黄褐色粘砂 (粘質土に近い)
 14. 黄褐色粘砂 (粘質土に近い)
 15. 暗褐色粘質土 (黒褐色土源)
 16. 黄褐色粘砂
 17. 暗褐色粘砂
 18. 黒褐色土 (褐色土上ノロック層)

19. 黄褐色粘質土
 20. 灰白色粘砂
 21. 灰褐色粘砂
 22. 暗褐色粘質土 (砂質強心)
 22'. 暗褐色粘質土
 23. 暗褐色粘質土 (黒褐色土源)
 24. 暗褐色粘質土
 25. 暗褐色粘質土 (砂質強心)
 26. 暗褐色粘質土 (砂質強心)
 27. 暗褐色粘質土
 28. 暗褐色粘質土
 29. 暗褐色粘質土 (砂質強心)
 29'. 暗褐色粘質土 (砂質強心)
 30. 灰褐色粘質土 (砂質強心)
 31. 暗褐色粘砂
 32. 暗褐色粘質土
 32'. 暗褐色粘質土 (黒褐色粘質土源)
 33. 灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土に近い)
 33'. 暗褐色粘質土 (黄褐色粘質土に近い)

34. 黄褐色粘質土
 35. 暗褐色粘砂 (黒褐色土源)
 36. 暗褐色粘砂
 36'. 黄褐色粘質土 (砂質強心)
 37. 暗褐色粘質土 (黄褐色土源)
 38. 暗褐色粘質土
 38'. 暗褐色粘質土 (砂質強心)
 39. 暗褐色粘質土 (砂質強心)
 39'. 暗褐色粘質土 (砂質強心)
 40. 暗褐色土
 41. 暗褐色粘砂 (砂質強心)
 42. 暗褐色粘砂
 43. 暗褐色粘質土 (砂質強心)
 44. 暗褐色粘質土 (黄褐色粘質土に近い)
 45. 暗褐色粘質土 (砂質強心)

第24図 中世以前の遺構実測図および層序 (S=1/80)

3. 遺物

(1) 土器 (第25図)

1～15は土師器皿である。1は基壇第2層から、2は基壇第3層から出土した。3・4は基壇第4層出土の土師器小皿である。5・6は直径6cm程度の小形品である。基壇第4層から出土した。7はPit-12出土の土師器小皿である。8・9は基壇第9層から出土した土師器小皿である。口縁端部の一部に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたとみられる。10は基壇第11層出土の土師器中皿である。11は中世の土師器小皿である。基壇第11層から出土した。中世の遺物であろう。12・13は、本殿SB-51の北東柱穴上層から出土した。礎石抜き取り後の埋め戻し土からの出土であり、本殿を解体してから拝殿の建築に入るまでの間に廃棄された遺物であろう。14・15は、調査直前の台風7号によってきた本殿東側の倒木坑から採取された土師小皿である。ほぼ同位置から出土した軒丸瓦・軒平瓦には鎌倉～室町時代のもがあり(48・66)、この土師小皿も13～14世紀のものとなるであろう。

16は瓦質播鉢である。拝殿南側の向拝柱穴から出土した。中世の遺物である。17～21は近世陶磁器である。17は焼き締めの播鉢である。信楽産とみられる。18は陶器小皿である。口縁部外面に煤が付着しており、灯明皿として使われたとみられる。19は透明釉の小皿で、口縁端部内外面に煤が付着する。これも灯明皿として使用されたものであろう。基壇第10層の断ち割り部清掃時に出土しているが、上層のものが混入した可能性が高い。20・21は染付の碗である。基壇第2層から出土した。近代以降の遺物であろう。

22～25は中国製輸入磁器とみられる。22は拝殿南側中央の縁柱柱穴から、23は基壇第4層から出土した。24・25は基壇第11層から出土した。24が青磁碗、25が青花碗とみられる。

26・27は古代の土師器坏・土師器小皿である。基壇下の包含層である灰黒色粘質土から出土した。11世紀中頃の遺物とみられるが、小片であるため厳密な時期決定は困難である。

28～30は弥生土器である。28は弥生時代前期～中期前半ごろの土器底部で、壺とみられる。29は弥生時代後期ごろの鉢底部、30は弥生時代後期ごろの長頸壺頭部である。

(2) 瓦 (第26～31図)

出土遺物の大半は近世の瓦類である。ことに拝殿基壇の礎石間には多量の平瓦が使用されていたが、漆喰貼りに改装された時に上半が破損したようで、完形品はみられない。ここでは、出土した全ての軒瓦、残存1/2以上の道具瓦を中心に報告する。また、礎石間の平瓦はサンプル的に残存が比較的良好な4点を図示し、2点のみ併用されていた棧瓦も図示した。

31・32は、拝殿基壇の周囲に埋められていた延べ石の抜き取り溝から出土した軒丸瓦である。31は巴の尾が長く、中世まで溯る可能性がある。32は、珠文の間隔が31とほぼ同じであるが、銀色に発色していることから比較的新しいものである可能性も考えられる。

34～36は基壇第4層出土の軒丸瓦である。34は瓦当が完存する。珠文は直径1.3cmのものが11個配置される。玉縁は幅1.7cmを測る。35・36も連珠の間隔及び大きさがほ

ぼ同一である。37は拝殿の柱穴（Pit-21）出土の軒丸瓦である。小片であるが、34～36と様相が類似する。

38～44は、基壇第4層出土の軒丸瓦である。38は瓦当が完存する。珠文は直径0.5cmのものが17個配される。玉縁は幅1.8cmを測る。39は38とほぼ同型であるが、玉縁の幅が1.4cmである。

46は、基壇第7層出土の軒丸瓦である。巴文の尾が長く伸びる特徴から、中世末ごろのものと考えられる。

47は、本殿の柱穴（柱設置土器）（Pit-61）出土の軒丸瓦である。巴文と珠文帯との間に1条の円圈が入る。

48は神社本殿東側の台風7号による風倒木の根元で採取したものである。直径約15cm、玉縁の厚さ2.2cm。珠文帯と巴文の間に1条の円圈がある。鎌倉～室町時代ごろの瓦であろう。

49～51は、基壇裾の延べ石抜き取り溝SD-01・02から出土した軒平瓦である。49・50はSD-02から出土した軒平瓦である。漆黒色に発色し、焼成も堅致である。また、50は瓦当の文様部分の幅が大きく縮小している。近代以降の遺物であろう。51はSD-01出土の軒平瓦である。近世埋土からの混入であろう。

52～57は、基壇第4層から出土した軒平瓦である。56・57は唐草が渦巻状になっている。58は、基壇第7層出土の軒平瓦である。59・60は、第8層出土の軒平瓦である。62は、第9層出土の軒平瓦である。瓦当文様の上部に1条の線分がある。63は、第12層出土の軒平瓦である。

64は、Pit-60の礫層から出土した軒平瓦である。唐草文の周囲を郭線が1条巡る。瓦当面上端には角に面取りがなされている。その文様から、室町時代の軒平瓦と考えられる。礎石設置時の遺物であるため、建物の建築時期の上限を示す遺物として大きな意味をもつ。

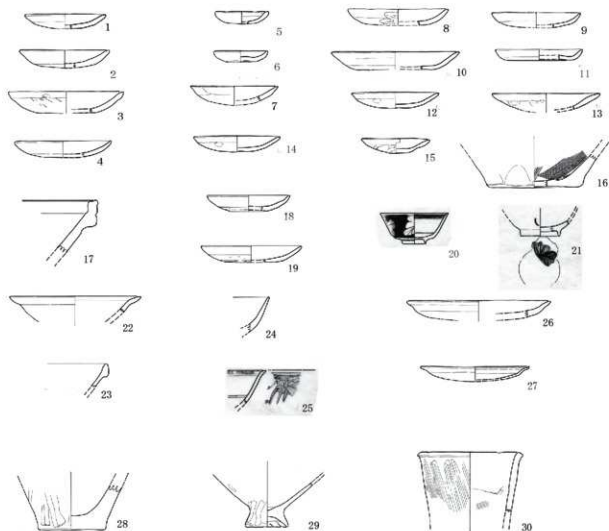
65は、Pit-61出土の軒平瓦である。Pit-60のものと同様に、唐草文の周囲に郭線が1条巡るタイプのものである。礫層中から出土した。

66は48と同じ風倒木の根本で採取したものである。唐草文の周囲に珠文が巡る。中世の遺物であろう。

67・68は、鳥居改築工事時の工事立会で出土した軒平瓦である。多量の平瓦・丸瓦が出土したが、軒瓦はこの菊花文の平瓦片2点のみであった。時期は明らかでない。

基壇第4層から、3種類の道具瓦が出土した。69～71は、丸瓦列に用いられる道具瓦である。69が全長13.3cm、幅13.9cm、高さ6.9cmをはかる。72・73は69とほぼ同様の形で、一端が傾斜するものである。74は台形状を呈する瓦である。全長12cm、厚さ1.2cm。75・76の菊丸瓦と組み合わせられて大棟等の飾りに用いられたものであろう（第11図下参照）。

75・76は基壇第4層から出土した菊丸瓦である。75の直径は9.8cm、玉縁の厚さ0.8cm。76の直径は9.6cm、玉縁の厚さ0.7cm。中心付近にひび割れがみられる。両者とも菊花の花弁は8枚である。



第25図 土器 (S=1/4)

77～82は、基壇の礎石間に並べられた平瓦・棧瓦である。77・78は初期の棧瓦で、1辺の先端約2cmが折れている。また、78の上端から1.5cmの所に釘穴がある。79～82は平瓦である。79は全長25.8cm、80は全長27.2cm、81は全長24.8cm、82は全長25.7cmをはかる。内外面ともにナデ調整で仕上げられている。

(3) 金属器 (第32図)

83はPit-13から出土した煙管の吸口部分である。残存長5.6cm、直径1.05cm。材質は青銅である。

84はSB-01第2'層出土の銅板である。用途不明。幅1.3cm、残存長2.0cm、厚さ0.1cm。

今回の調査では、鉄釘25点が出土している。しかし、急激な錆化のため保管中の破損が激しく、図化が困難な状況となっていた。ここでは出土直後に作成された略図23点(85～101・103～108)及び残存が良好であったもの1点の実測図(102)を示す。鉄釘は断

第4表 遺物観察表

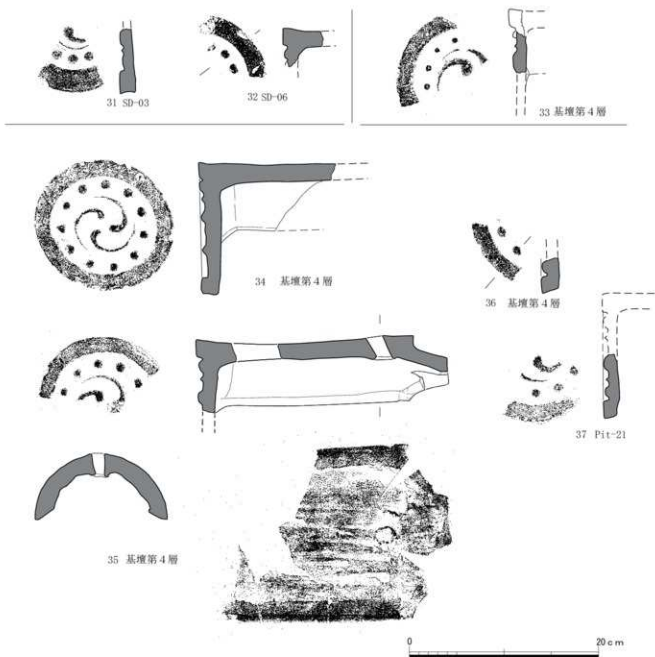
土器 (第25区 1~30)

※法量の()は復元値

種別	器種	出土遺構	層位	法量 (cm)			色調	調整	備考	
				口徑	底徑	器高				
1	土師質土器	皿	基礎	第2層	(8.6)	-	1.9	2.5Y 7/4 7.5Y 6/6	内面ナデ、口縁部外面ココナデ、外面ナ平無調整。	
2	土師質土器	皿	基礎	第3層	9.6	-	1.9	浅黄緑 10Y 8/4	内面ナデ、口縁部外面ココナデ、外面ナ平無調整。	
3	土師質土器	皿	基礎	第4層	(12.6)	-	2.3	浅黄緑 10Y 8/3	内面ナデ、口縁部外面ココナデ、外面ナ平~底面無調整。	打明量として使用。
4	土師質土器	皿	基礎	第4層	(10.2)	-	1.8	浅黄緑 7.5Y 8/3	内面ナデ、外面無調整。	
5	土師質土器	皿	基礎	第4層	(5.8)	-	1.6	緑 5Y 6/6	内面ナデ、外面無調整(壁多く残る)。	
6	土師質土器	皿	基礎	第4層	5.8	-	1.7	緑 5Y 6/6	内面ナデ、外面無調整(壁多く残る)。	
7	土師質土器	皿	P11-12	第1層	9.2	-	-	浅黄緑 10Y 8/4	内面ナデ、口縁部外面ココナデ、底面無調整。	打明量として使用。
8	土師質土器	皿	基礎	第9層	(10.8)	-	1.7	浅黄緑 7.5Y 8/3		
9	土師質土器	皿	基礎	第9層	(9.4)	-	1.6	浅黄緑 7.5Y 8/3		
10	土師質土器	皿	基礎	第11層	(13.6)	-	1.9	浅黄緑 7.5Y 8/4	内面ナデ、口縁部外面ココナデ、底面無調整。	打明量として使用。
11	土師質土器	皿	基礎	第11層	(9.2)	-	1.8	緑 5Y 6/6	内面ナデ、口縁部外面ココナデ、底面無調整。	
12	土師質土器	皿	P11-52	第1層	9.3	-	1.8	浅黄緑 7.5Y 8/3	内面ナデ、口縁部外面ココナデ、外面ナ平無調整。	打明量として使用。
13	土師質土器	皿	P11-52	第1層	(11.6)	-	-	浅黄緑 7.5Y 8/3	内面ナデ、口縁部外面ココナデm外面ナ平無調整。	
14	土師質土器	皿	本館東側 風物木立	-	7.6	-	1.8	緑 7.5Y 7/6	内面ナデ、口縁部外面ココナデ、外面ナ平無調整。	打明量として使用。
15	土師質土器	皿	本館東側 風物木立	-	7.2	-	1.6	緑 7.5Y 7/6	内面ナデ、口縁部外面ココナデ、外面ナ平無調整。	打明量として使用。
16	瓦葺土器	楕円	P11-24	第1層	-	(10.4)	-	母背灰 第 3/1	断面1単位 10本/2.5cm。	
17	陶器	楕円	基礎	第4層	-	-	-	赤	断面1単位 10本/2.5cm。無釉。	小片のため口縁不明。
18	陶器	皿	基礎	第2層	(8.8)	-	1.3	浅黄 2.5Y 7/3	内面ココナデ、口縁部外面ココナデ、外面ナ平調整~9割り。	灰釉の陶器。打明量。
19	陶器	皿	基礎	第10層	-	-	1.7	緑 2.5Y 6/8	内面ココナデ、口縁部ココナデ、外面調整~9割り。	透明釉の打明量。
20	国産磁器	杯	基礎	第2層	(7.4)	(2.6)	3.3		発行。	青色の景色良好。
21	国産磁器	陶	基礎	第2層	-	-	-		色絵。外面赤、内面緑・紫の色で彩色。	小片のため法量不明。
22	青磁	蓋	P11-68	第1層	(約14)	-	-	釉:明緑灰 106 7/1		小片のため口縁不明。
23	白磁	陶	基礎	第4層	-	-	-	釉:灰白 2.5Y 8/1	口縁玉縁。	
24	青磁	陶	基礎	第11層	-	-	-	釉:明緑灰 7.5Y 7/1		
25	磁器	皿	基礎	第11層	-	-	-		青花	磁器型?
26	土師器	杯	古代古式 粘質土	灰黒色	(13.4)	-	-	緑 2.5Y 6/6	内面ナデ、外面ナデ。	
27	土師器	皿	古代古式 粘質土	灰黒色	(11.6)	-	-	緑 5Y 6/6	内面ナデ、外面ナデ。	
28	弥生土器	卓底器	基礎	第9層	-	7.2	-	明赤陶 2.5Y 5/8	外面横位へフナデ。内面ナデ。	
29	弥生土器	鉢	基礎	第12層	-	4.6	-	緑 5Y 6/8	鉢底内外面ともナデ。台部外面指押さず。	
30	弥生土器	長頸壺	基礎	第12層	(約11)	-	-	明赤陶 2.5Y 5/8	外面横位へフナデ後縁位ミダキ。内面横位へケ後ナデ。	

青銅製品 (第32区 83~84)

製品名	出土遺構	層位	地区	法量 (cm)			備考
				全長	幅(径)	厚さ	
83	押さ(横口)	P11-13	第1層	5.6	1.1	0.1	
84	不明	S.B-01	第2層	2.0	1.2	0.2	薄い銅板小片。切斷面あり。



第26図 軒瓦1 (S=1/4)

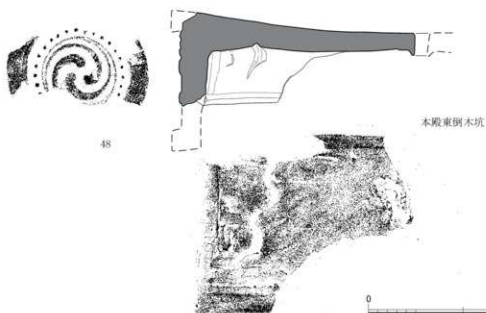
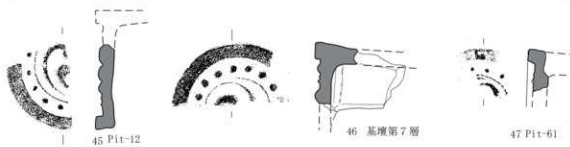
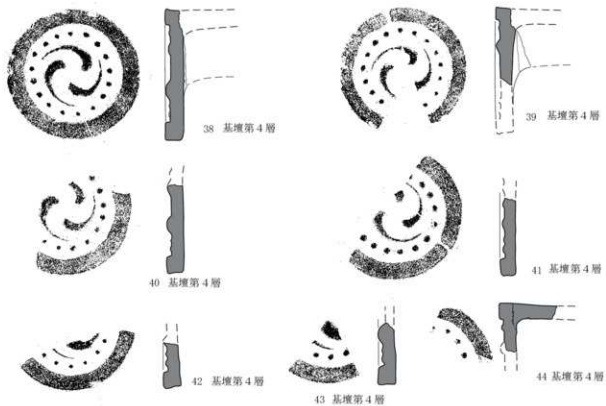
面方形で、江戸時代のもつとみられる。なお、109は多神社鳥居改築に伴って解体された旧鳥居に使用されていた鉄釘である。平成19年度に多神社宮司から寄贈を受けた。

(4) 銭貨(第33図)

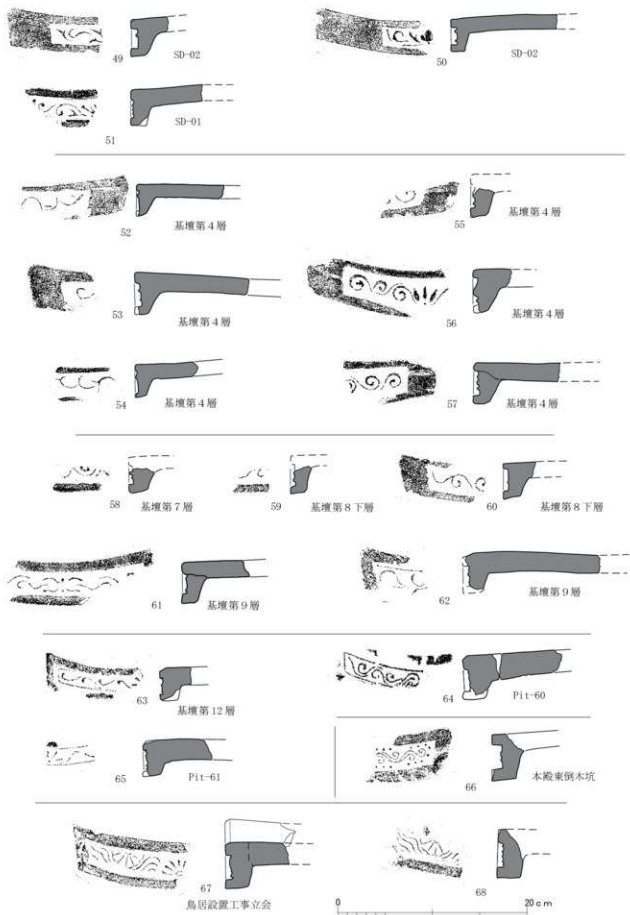
北宋銭? 1点、寛永通宝21点が出土した。

125は拝殿SB-01の柱穴Pit-09から出土した。年号は石で押しつぶされているため明瞭に読みとることができない。北宋銭とみられる。

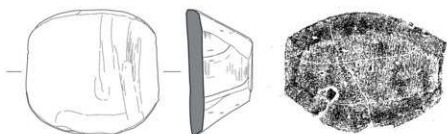
寛永通宝は、表土~拝殿基壇第9層にかけて出土した。110~120は表土から、121~123は基壇第2層から、124はPit-21から、126~131は基壇第8・9層から出土した。



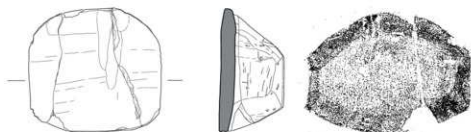
第27圖 軒丸瓦2 (S=1/4)



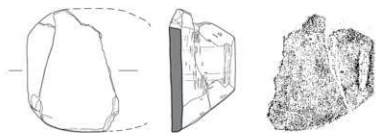
第28圖 軒平瓦 (S = 1/4)



69



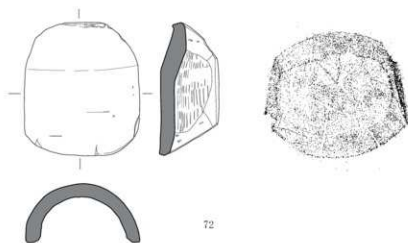
70



71



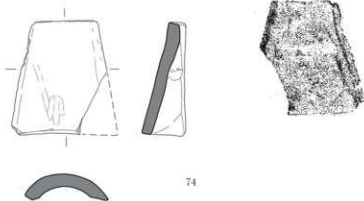
第29圖 道具瓦1 (S = 1/4)



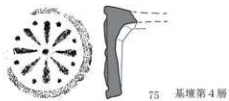
72



73



74



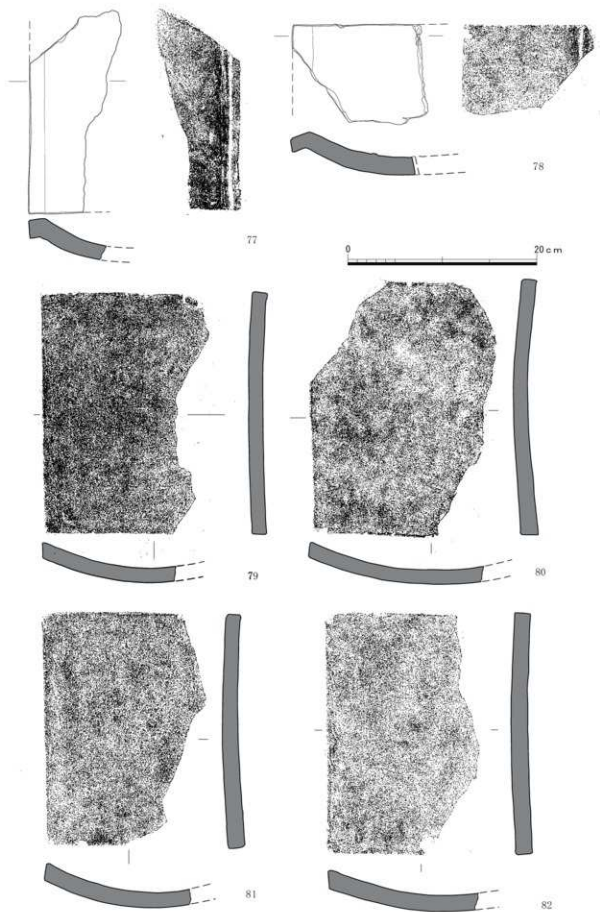
75 基壇第4層



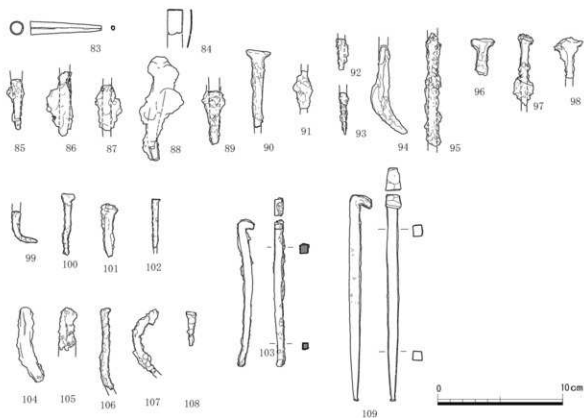
76 基壇第4層



第30圖 道具瓦2 (S=1/4)



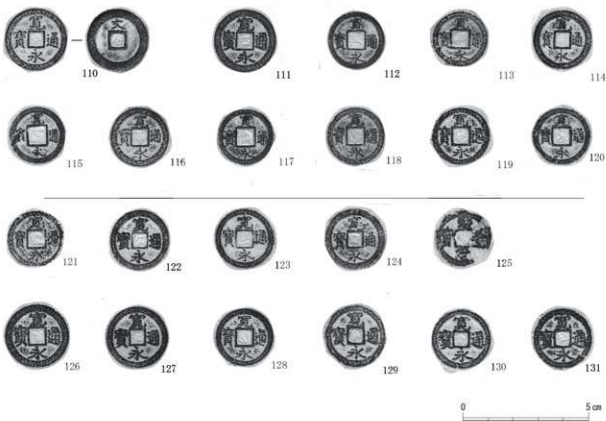
第31圖 平瓦・棧瓦 (S=1/4)



第32図 金属製品 (S = 1/3)

第5表 鉄釘一覽

製品名	出土遺構	層位	地区	全長 (cm)	太さ (cm)	頭部幅 (cm)	重量 (g)	備考
85 鉄釘	本殿基壇	第11層	E05-08	(4.0)	0.9	-	3.48	0002M
86 鉄釘	本殿基壇	第11層	E05-08	(5.1)	0.9	-	12.58	0003M 先端部分
87 鉄釘	本殿基壇	第11層	E05-08	(3.7)	0.8	-	9.75	0004M
88 鉄釘	本殿基壇	第11層	E05-08	(8.3)	0.9	-	38.19	0005M 先端部欠損
89 鉄釘	本殿基壇	第10層	西半	(4.2)	0.9	-	6.61	0006M
90 鉄釘	本殿基壇	第10層	中央	(6.2)	0.9	1.9	11.49	0007M
91 鉄釘	本殿基壇	第10層	中央	(3.0)	0.6	-	4.37	0008M
92 鉄釘	本殿基壇	第10層	中央	(2.46)	0.4	-	1.87	0009M
93 鉄釘	本殿基壇	第10層	中央	(3.3)	0.4	-	0.92	0010M
94 鉄釘	本殿基壇	第10層	東半	(7.1)	0.7	-	12.94	0011M
95 鉄釘	拝殿基壇	第8層	西半	(2.8)	1.8	1.8	4.54	0012M
96 鉄釘	拝殿基壇	第8層	中央	(5.7)	0.8	1.2	7.49	0013M
97 鉄釘	拝殿基壇	第8層	中央	(9.0)	0.8	-	19.10	0014M
98 鉄釘	拝殿基壇	第8層	中央	(3.2)	0.9	2.2	3.66	0015M
99 鉄釘	拝殿基壇	第8層	中央	(2.5)	0.6	-	1.33	0016M L字形に屈曲
100 鉄釘	拝殿基壇	第5層	南端	(4.9)	0.5	1.0	2.88	0017M
101 鉄釘	拝殿基壇	第4層	北端	(4.1)	0.7	-	4.97	0018M
102 鉄釘	拝殿基壇	第3層	西半	(3.9)	0.5	-	1.96	0019M
103 鉄釘	拝殿基壇	第2層	南端	11.7	0.7	1.4	24.81	0020M
104 鉄釘	拝殿基壇	第2層	南端	(6.0)	1.2	-	14.16	0021M
105 鉄釘	拝殿基壇	第2層	南端	(3.4)	1.3	-	6.72	0022M
106 鉄釘	拝殿基壇	第1層	南端	(6.5)	0.8	-	6.05	0023M
107 鉄釘	P11-68	第1層	-	(5.1)	0.6	-	6.77	0024M 屈曲
108 鉄釘	P11-68	第1層	-	(2.7)	0.8	-	0.99	0025M
109 鉄釘	鳥居	-	-	16.5	0.8	1.8	68.70	多忠記氏より寄贈



第33図 出土銭貨 (S = 2/3)

第6表 銭貨一覧

銭名	出土遺構	層位	地区	直径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	背文	備考	
110	寛永通宝	-	表土	2.51	0.12	3.67	「大」	00011MC	
111	寛永通宝	-	表土	2.52	0.12	3.75	なし	00012MC	
112	寛永通宝	-	表土	2.29	0.11	2.59	なし	00013MC	
113	寛永通宝	-	表土	2.20	0.09	2.10	なし	00014MC	
114	寛永通宝	-	表土	2.38	0.12	3.28	なし	00015MC	
115	寛永通宝	-	表土	2.28	0.11	2.62	なし	00016MC	
116	寛永通宝	-	表土	2.35	0.10	2.52	なし	00017MC	
117	寛永通宝	-	表土	2.24	0.10	2.49	なし	00018MC	
118	寛永通宝	-	表土	2.31	0.09	2.39	なし	00019MC	
119	寛永通宝	-	表土	2.30	0.11	2.75	なし	00020MC	
120	寛永通宝	-	表土	2.31	0.12	2.29	なし	00021MC	
121	寛永通宝	押殿基礎	第2層	南端東	2.30	0.09	1.37	なし	00007MC
122	寛永通宝	押殿基礎	第2層	北端中央	2.41	0.11	3.04	なし	00008MC
123	寛永通宝	押殿基礎	第2層	北端東	2.35	0.11	2.33	なし	00009MC
124	寛永通宝	P1t-21	第1層		2.47	0.17	3.44	なし	礎石の重みで変形 00010MC
125	□元口寶	P1t-09	第1層		2.25	0.13	1.63	なし	礎石の重みで破損 00022MC
126	寛永通宝	本殿基礎	第8層	東半	2.56	0.14	3.80	なし	00006MC
127	寛永通宝	本殿基礎	第8層	中央	2.45	0.12	3.88	なし	00005MC
128	寛永通宝	本殿基礎	第8層下	東半	2.30	0.12	2.68	なし	00004MC
129	寛永通宝	本殿基礎	第9層	東半	2.44	0.12	2.70	なし	00003MC
130	寛永通宝	本殿基礎	第9層	東半	2.38	0.14	3.53	なし	00002MC
131	寛永通宝	本殿基礎	第9層	東半	2.37	0.10	2.58	なし	00001MC

第三章 石材の採石地について

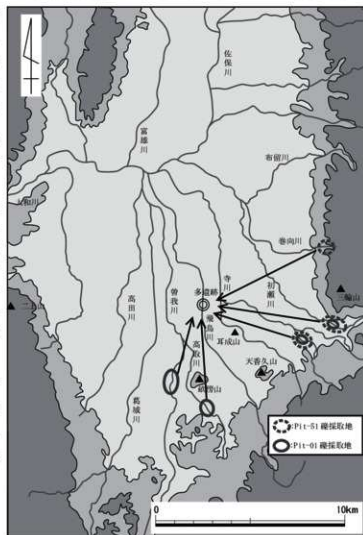
奈良県立橿原考古学研究所共同研究員
奥田 尚

Pit-01 と Pit-51 の礎石の下に使用されていた石材の石種とその特徴、及び石種の分布地については第7表に、石種と粒径・粒形・量については第8表に示すとおりである。石材と同様の岩相を示し、川原石様の石材が産する河川を田原本町多をを中心に近距離で求めれば、巻向川、初瀬川、寺川、飛鳥川、高取川、曾我川があげられる。この河川において、同質の石が複数の河川に産する場合と一河川にしかみられない場合とがある。礫岩や礫質砂岩、片麻状石英閃緑岩などは曾我川に、石英閃緑岩Bや閃緑岩Bは寺川に、閃緑岩Aや閃緑岩Cは初瀬川に、アブライトAは巻向川に、アブライトCやアブライト質黒雲母花崗岩C・Dなどは高取川にのみみられる。観察した川原石様の石材は前述の5河川において全て採取できる。

Pit-01 と Pit-51 の採石地を河川の石種構成をもとに推定すれば、Pit-01 は曾我川、高取川、寺川、初瀬川、Pit-51 は巻向川、寺川、初瀬川となる。更に、石材の粒径と粒形を考慮して各河川の採取位置を推定すれば、第34図のようになる。ピットにより石材の使用時期は異なるが、採石地が同じ付近であるのは初瀬川と寺川である。

使用重量で見れば、Pit-01 では少なくとも曾我川から 15.9 kg、高取川から 5.3 kg、曾我川または高取川から 8.2kg、寺川から 0.4 kg、初瀬川から 1.6 kg の石材が運ばれたことになり、主として曾我川や高取川から運ばれている。

Pit-51 では少なくとも巻向川から 29.0kg、寺川から 3.7 kg、初瀬川から 15.3 kg の石材が運ばれたことになり、使用量の半分以上が巻向川から運ばれている。



第34図 裏込石採取地

第7表 裏込石の石種と岩相及びその採石地

石種	石材の色・粒形・形状	石種の岩相	石材の採石推定地
ペグマタイト	色は茶灰色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜10mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が5〜20mm、量が多い。	このような岩相を示す石は春向川や善徳川川の流域に比較的に広く分布する。また、現置炭鉱の中心部がペグマタイトに置かれている場合がある。春向川や初瀬川の川原石にみられる。
アブライト	色は灰白色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	石英・長石・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5〜1mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5〜1mm、量が多い。柘榴石は赤茶色、粒状で、粒径が0.5〜1mm、量が僅かである。レンズ状に集合している。	このような岩相を示す石は春向川の上流付近に分布するアブライトの岩相の一部に似ている。春向川の川原石に同様の岩相を示す石がみられる。
アブライトB	色は灰白色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜5mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2〜5mm、量が多い。	このような岩相を示す石は黒取川と分布する石にみられる。黒取川同様にこのような岩相が各地でみられ、産地を特定できない。
アブライトC	色は淡褐色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜4mm、量が多い。長石は灰白色と淡褐色のものがある。灰白色の長石は、粒径が2〜3mm、量が中である。淡褐色の長石は、粒径が2〜4mm、量が中である。	このような岩相を示す石は高取川の川原石にみられる。
アブライト質黒雲母花崗岩A	色は灰白色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	石英・長石・黒雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2〜6mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5〜2mm、量がごくごく僅かである。柘榴石は赤茶色、粒状で、粒径が2〜6mm、量が中である。葉状をなして集まっている。	このような岩相を示す石は春向川の上流付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。春向川の川原石に同様の岩相を示す石がみられる。
アブライト質黒雲母花崗岩B	色は淡茶灰色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜3mm、量が中である。長石は灰白色と淡茶色を呈する。灰白色の長石は、粒径が2〜8mm、量が多い。淡茶色の長石は、粒径が2〜5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1mm、量がごく僅かである。	このような岩相を示す石は春向川の上流付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。春向川の川原石に同様の岩相を示す石がみられる。
アブライト質黒雲母花崗岩C	色は灰白色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜6mm、量が中である。長石は灰白色と淡褐色のものがある。灰白色の長石は、粒径が2〜5mm、量が中である。淡褐色の長石は、粒径が2〜5mm、量が中である。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が1〜2mm、量がごく僅かである。	このような岩相を示す石は高取川付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。高取川の川原石にみられる。
アブライト質黒雲母花崗岩D	色は淡褐色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が4〜6mm、量が中多い。長石は淡褐色、粒径が4〜8mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状・粒状で、粒径が1〜2mm、量がごく僅かである。	このような岩相を示す石は高取川の川原石にみられる。
アブライト質白雲母花崗岩	色は灰白色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	石英・長石・白雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が3〜6mm、量が非常に多い。白雲母は無色透明、板状で、粒径が1〜3mm、量がごく僅かである。柘榴石は赤茶色、粒状で、粒径が1〜3mm、量が僅かである。	このような岩相を示す石は春向川の上流付近に分布する白雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。春向川の川原石に同様の岩相を示す石がみられる。
片麻状アブライト	色は灰白色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	顕著な片麻状を呈する。石英・長石・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜6mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が4〜8mm、量が非常に多い。柘榴石は赤茶色、粒状で、粒径が0.5〜1mm、量が僅かである。	このような岩相を示す石は春向川の上流付近に分布するアブライトの岩相の一部に似ている。春向川の川原石に同様の岩相を示す石がみられる。
片麻状アブライト質黒雲母花崗岩A	色は灰白色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5〜1.5mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5〜1.5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5mm、量がごく僅かである。レンズ状に集合して粒状をなす。	このような岩相を示す石は初瀬川の左岸に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。
片麻状アブライト質黒雲母花崗岩B	色は灰白色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜6mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が3〜8mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2〜3mm、量がごくごく僅かである。	このような岩相を示す石は春向川の上流付近に分布する柘榴石黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。春向川の川原石に同様の岩相を示す石がみられる。
片麻状黒雲母花崗岩A	色は灰白色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜8mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2〜8mm、量が多い。黒雲母は茶褐色、板状で、粒径が2〜6mm、量がごく僅かである。	このような岩相を示す石は竜王山から初瀬川の流域に部分的に分布する。初瀬川や竜王山の山麓付近の谷筋の川原石に僅かにみられる。
片麻状黒雲母花崗岩C	色は灰色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5〜1mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5〜1mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5〜1mm、量が中である。	このような岩相を示す石は竜王山付近や初瀬川の流域に部分的に分布する。初瀬川や竜王山の山麓付近の谷筋の川原石に僅かにみられる。
片麻状黒雲母花崗岩E	色は淡褐色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜4mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2〜5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1〜4mm、量が中である。	このような岩相を示す石は竜王山付近や初瀬川の流域に部分的に分布する。初瀬川や竜王山の山麓付近の谷筋の川原石に僅かにみられる。
黒雲母花崗岩A	色は茶灰色で、粒形が単角、表面が滑らかで川原石種である。	石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2〜6mm、量が中である。長石は茶灰色、粒径が5〜7mm、量が多い。黒雲母は茶褐色、レンズ状で、粒径が3〜6mm、量が僅かである。	このような岩相を示す石は初瀬川の上流付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。初瀬川の川原石に同様の岩相を示す石がみられる。

黒雲母花崗岩 B	色は灰色で、粒形が稜角、表面が滑らかで川原石様である。	石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～6mm、量が多である。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2～6mm、量が中である。	このような岩相を示す石は初瀬川の川原石と同様の岩相を示す石がみられる。
黒雲母花崗岩 C	色は灰色で、粒形が稜角、表面が滑らかで川原石様である。	石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～6mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2～6mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量が中である。	このような岩相を示す石は初瀬川の川原石と同様の岩相を示す石がみられる。
黒雲母花崗岩 D	色は暗灰色で、粒形が稜角、表面が滑らかで川原石様である。	微かに圧砕されている。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量が多である。長石は灰白色、粒径が1～2mm、量が多である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が多い。	このような岩相を示す石は高取川の川原石にみられる。
黒雲母花崗岩 E	色は暗灰色で、粒石である。	石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～3mm、量が多い。長石は灰白色、灰白色透明で、粒径が2～3mm、量が多である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2～4mm、量が多い。	このような岩相を示す石は龍平川付近にみられる。
黒雲母花崗岩 F	色は暗灰色で、粒形が稜角、表面が滑らかで川原石様である。	石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～1mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5～1mm、量が多である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が多い。	このような岩相を示す石は春日町の北瀬から初瀬川にかけての付近にみられる。龍島川や寺川、初瀬川の川原石にみられる。
黒雲母花崗岩 G	色は暗灰色で、粒形が角、表面が滑らかで川原石様である。	石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.3～0.5mm、量が多である。長石は灰白色、粒径が0.3～0.5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.3～0.5mm、量が多である。	このような岩相を示す石は龍島川や寺川、初瀬川の川原石にみられる。
石英閃緑岩 A	色は灰色で、粒形が稜角、表面が滑らかである。	石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～1.5mm、量が多である。長石は灰白色、粒径が1～2mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～3mm、量が多い。角閃石は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量が中である。	このような岩相を示す石は初瀬から上流の初瀬川流域に分布する石英閃緑岩の岩相の一部に石に似ている。初瀬川の川原石と同様の岩相を示す石がみられる。
石英閃緑岩 B	色は淡茶灰色で、粒形が角、表面が滑らかで川原石様である。	石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～1.5mm、量が多である。長石は灰白色、粒径が3～8mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、暗緑色で、粒状で、粒径が2～8mm、量が多である。角閃石は黒色、板状で、粒径が3～6mm、量が多である。	このような岩相を示す石は寺川の流域に分布する石英閃緑岩の岩相の一部に石に似ている。寺川の川原石にみられる。
石英閃緑岩 C	色は灰色で、粒形が稜角、表面が滑らかで川原石様である。	石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量が多である。長石は灰白色透明、粒径が4～6mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が3～5mm、量が多である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が4～8mm、量が多である。	このような岩相を示す石は貝吹山から岩船山にかけての付近に分布する龍門岳石英閃緑岩の岩相の周辺部の岩相の一部に似ている。養後川の川原石にみられる。
石英閃緑岩 D	色は灰色で、粒形が角、表面が滑らかで川原石様である。	石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～1mm、量が多である。長石は灰白色、粒径が0.5～2mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1.5mm、量が多である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が0.5～2mm、量が多である。	このような岩相を示す石は貝吹山から岩船山にかけての付近に分布する龍門岳石英閃緑岩の岩相の周辺部の岩相の一部に似ている。養後川の川原石にみられる。
石英閃緑岩 E	色は淡茶灰色で、粒形が稜角、表面が滑らかで川原石様である。	角閃石の柱状結晶が目立つ。石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～0.8mm、量が多である。長石は灰白色・淡茶灰色、粒径が0.3～3mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.3～0.5mm、量が中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が0.3～10mm、量が多である。	このような岩相を示す石は萬葉町の市野付近に分布する石英閃緑岩の岩相の一部に似ている。養後川の川原石に似てみられる。
片麻状石英閃緑岩	色は灰白色で、粒形が稜角、表面が滑らかで川原石様である。	顕著な片麻状を示す。レンズ状に黒色の細粒石英閃緑岩を含む。石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3～8mm、量が多である。長石は灰白色と淡褐色をなす。灰白色の長石は、粒径が3～8mm、量が多い。淡褐色の長石は、粒径が2～6mm、量が多である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2～6mm、量が多である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が2～6mm、量が多である。	このような岩相を示す石は伊豫神村付近に分布する伊豫黒雲母閃緑岩の岩相の一部に似ている。養後川の川原石にみられる。
閃緑岩 A	色は暗灰色で、粒形が稜角、表面が滑らかで川原石様である。	長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。長石は淡褐色、粒径が1～3mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が多である。角閃石は黒色、粒径が0.5～1.5mm、量が多である。	このような岩相を示す石は初瀬川の川原石にみられる。
閃緑岩 B	色は淡緑色で、粒形が稜角、表面が滑らかで川原石様である。	長石・黒雲母・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が0.3～1mm、量が多い。黒雲母は黒色、黄色で、板状で、粒径が0.4～0.7mm、量が多である。角閃石は黒色、粒径が0.3～1mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が0.3～0.5mm、量が多である。	このような岩相を示す石は寺川の流域に分布する石英閃緑岩にレンズ状に含まれる閃緑岩の岩相の一部に石に似ている。
閃緑岩 C	色は灰色で、粒形が稜角、表面が滑らかである。	長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が1～3mm、量が多い。黒雲母は褐色、板状で、粒径が0.5～2mm、量が多である。角閃石は黒色、粒径が1～3mm、量が多である。	このような岩相を示す石は初瀬から上流の初瀬川流域に分布する閃緑岩の岩相の一部に石に似ている。初瀬川の川原石と同様の岩相を示す石がみられる。

閃緑岩 E	色は暗灰色で、鉱物が重厚。自然光では滑らかで、川原石様である。	長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。長石は無色透明、灰白色透明で、粒径が0.5～2mm、量が中である。黒雲母は黒色、金色で、板状、粒径が0.5～1mm、量が中である。角閃石は黒色、粒径が0.5～2mm、量が多い。	このような岩種を示す石は寺川流域に分布する閃緑岩の岩種の一部に似ている。
斑岩 A	色は灰色で、鉱物が角、表面が風化してザラザラしている。	長石・角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～6mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～5mm、量が多い。	このような岩種を示す石は岩井川付近に分布する斑岩の岩種の一部に似ている。
斑岩 B	色は灰色で、鉱物が重厚、表面が風化してザラザラしている。	長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が0.5～3mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が0.5～3mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。	このような岩種を示す石は和歌山から上流の初瀬川流域、三輪山に分布する斑岩の岩種の一部に似ている。
斑岩 C	色は灰緑色で、鉱物が重厚、表面が風化してザラザラしている。	長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色で珪晶と基質をなすものがある。珪晶の長石は、粒径が2～3mm、量が僅かである。基質の長石は、粒径が0.5～1.5mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が0.5～2mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が0.5～1mm、量が多い。	このような岩種を示す石は飯井川付近の御室山麓の岩種の一部に似ている。
斑岩 D	色は灰緑色で、鉱物が重厚、表面が風化してザラザラしている。	長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が3～6mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～6mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が3～6mm、量が多い。	このような岩種を示す石は和歌山から上流の初瀬川流域、三輪山に分布する斑岩の岩種の一部に似ている。
斑岩	色は灰褐色で、鉱物が角、表面が滑らかで川原石様である。	珪晶系結石は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.5～3mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5～3mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が多い。石基は微かである。石英はガラス質である。	このような岩種を示す石は岩井川と産する。奈良盆地周辺の御室山麓が分布する付近に岩種として見られ、産所を限定できない。
変輝緑岩 A	色は暗灰緑色で、鉱物が重厚、表面が川原石様である。	長石・角閃石・輝石の柱状結晶が噛み合っている。長石は灰白色、柱状で、粒径が0.5～1.5mm、量が多い。角閃石は黒色、柱状で、粒径が0.5～1mm、量が多い。輝石は灰緑色透明、短柱状で、粒径が0.3～0.5mm、量がごく僅かである。	このような岩種を示す石は寺川や鳥川流域分布する石炭閃緑岩にレンズ状に含まれる変輝緑岩の岩種の一部に似ている。寺川や鳥川の川原石にみられる。
変輝緑岩 B	色は暗灰色で、鉱物が角、表面が滑らかで川原石様である。	長石と角閃石が噛み合っている。長石は灰白色で、珪晶と基質をなすものがある。珪晶の長石は、板状で、粒径が1～6mm、量が多い。基質の長石は柱状で、粒径が0.5～1mm、量が多い。角閃石は黒色、柱状で、粒径が0.5～1mm、量が多い。石英は微かにみられ、ガラス質である。	このような岩種を示す石は鳥島地方に広く分布する龍門岳石英閃緑岩にレンズ状に含まれる変輝緑岩の岩種の一部に似ている。鳥島川や寺川、高取川の川原石にみられる。
変輝緑岩 C	色は灰緑色で、鉱物が重厚、表面が滑らかで川原石様である。	長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。長石は灰白色で、珪晶と基質をなすものがある。珪晶の長石は、板状で、粒径が1～6mm、量が多い。基質の長石は柱状で、粒径が0.5～1.5mm、量が多い。黒雲母は褐色、板状で、粒径が0.2～0.5mm、量が僅かである。角閃石は黒色、柱状で、粒径が1～2mm、量が多い。石英は微かにみられ、ガラス質である。	このような岩種を示す石は鳥島地方に広く分布する龍門岳石英閃緑岩にレンズ状に含まれる変輝緑岩の岩種の一部に似ている。鳥島川や寺川、高取川の川原石にみられる。
圧砕岩 A	色は灰白色、鉱物が重厚、表面が滑らかで川原石様である。	アブライト質黒雲母花崗岩が圧砕されたものである。長石は球粒状をなす。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～8mm、量が多い。長石は灰白色で多少暗褐色。球粒状で、粒径が5～13mm、量が多い。黒雲母は暗緑色で、不定形に延びている。粒径が2～8mm、量が僅かである。	このような岩種を示す石は中央構造線付近の御室山麓部に部分的にみられる圧砕岩の岩種の一部に似ている。高取川や曾我川の川原石にみられる。
圧砕岩 B	色は灰白色、鉱物が角、表面が滑らかで川原石様である。	アブライト質黒雲母花崗岩が圧砕されたものである。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、砕けて角粒状をなし、粒径が2～6mm、量が多い。長石は灰白色、砕けて角粒状をなし、粒径が2～6mm、量が多い。黒雲母は黒色で、板状であり、不定形である。粒径が2～3mm、量がごく僅かである。	このような岩種を示す石は中央構造線付近の御室山麓部に部分的にみられる圧砕岩の岩種の一部に似ている。高取川や曾我川の川原石にみられる。
圧砕岩 C	色は灰色で、鉱物が角、表面が滑らかで川原石様である。	圧砕されて、鉱物が粒状化している。石英・長石・角閃石の珪晶を黒雲母が充填している。石英は無色透明、粒径が1～1.5mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が1～2mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が1～3mm、量が僅かである。黒雲母は暗緑色、不定形で、粒径が1～2mm、量が多い。	このような岩種を示す石は伊原野村付近に分布する厚層石英閃緑岩の岩種の一部に似ている。曾我川の川原石にみられる。
輝岩	色は褐色で、鉱物が重厚、表面が滑らかで川原石様である。	流紋岩は灰白色、鉱物が重厚、粒径が3～60mm、量が多く、石英がガラス質である。石英は無色透明、鉱物が0.5～1mm、量が多い。珪六角隕あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、鉱物が重厚、粒径が1～3mm、量が僅かである。基質は細密である。	このような岩種を示す石は曾我川の上流に分布する和泉層群の輝岩の岩種の一部に似ている。曾我川の川原石にみられる。
輝岩砂岩	色は灰褐色で、鉱物が角、表面が滑らかで川原石様である。	片理が微かにみられ、変形と片理を受けている。構成鉱は流紋岩、石英、長石である。流紋岩は灰白色、褐色で、鉱物が重厚・重厚、粒径が0.5～4mm、量が多い。石英はガラス質である。石英は無色透明、鉱物が0.5～1.5mm、量が多い。珪六角隕あるいはその一部が認められるものが僅かである。長石は灰白色、鉱物が重厚、粒径が0.5～1.5mm、量が僅かである。基質は細密である。	このような岩種を示す石は曾我川の上流に分布する和泉層群の輝岩の岩種の一部に似ている。曾我川の川原石にみられる。

第8表 裏込石の石種別集計表

石の種類	色調	P1-1計				P1-2計				備考											
		個数 (個)	比率 (%)	重量 [kg]	比率 (%)	個数 (個)	比率 (%)	重量 [kg]	比率 (%)												
1 パテオイト	灰白	3	1	3	2	0	0	0	0	巻内川・巻越川											
2 アゾライトA	灰白	4	0	1	7	3	10	0	0	巻内川											
3 アゾライトB	におい青	0	4	0	5	9	4	4,638	0	巻内川											
4 アゾライトC	浅黄緑					0	0	1	0	巻内川											
5 アゾライト集積部 巻越川A	におい青	4	19	7	20	9	31	11,319	20	巻内川											
6 アゾライト集積部 巻越川B	緑黄	2	0	0	0	3	2	604	1	巻内川											
7 アゾライト集積部 巻越川C	灰白					0	0	1	0	巻内川											
8 アゾライト集積部 巻越川D	灰白					0	0	0	0	巻内川											
9 アゾライト集積部 巻越川E	緑黄	0	1	1	0	3	2	514	0	巻内川											
10 片麻状アゾライト	灰白	3	10	13	2	2	10	2,730	0	巻内川											
11 片麻状アゾライト集 積部巻越川A	におい青	3	0	4	0	1	11	0,953	4	巻内川											
12 片麻状アゾライト集 積部巻越川B	灰白	0	20	6	20	12	2	36	16	0	巻内川										
13 片麻状集積部 巻越川C	緑黄	4	7	7	3	1	11	0,500	3	巻内川											
14 片麻状集積部 巻越川D	灰黄	2	3	1	2	1	4	1,185	3	巻内川											
15 片麻状集積部 巻越川E	灰白					0	0	0	1	0	巻内川										
16 高品位巻越川A	黄赤	2	2	1	1	2	1	501	1	巻内川											
17 高品位巻越川B	灰赤	1	3	1	1	2	2	947	0	巻内川											
18 高品位巻越川C	緑黄	1	11	2	11	3	14	6,754	0	巻内川											
19 高品位巻越川D	明灰黄					0	0	1	1	1	巻内川										
20 高品位巻越川E	緑灰					0	0	1	1	1	巻内川										
21 高品位巻越川F	緑灰					0	0	3	0	4	0	巻内川									
22 高品位巻越川G	オリーブ灰					0	0	11	0	0	巻内川・巻内川										
23 石質団粒部A	灰黄	2	2	1	1	4	1	5	3	1,003	2	巻内川									
24 石質団粒部B	緑黄	1	1	1	0	7	0	0	0	0	巻内川及び巻内川										
25 石質団粒部C	灰白					0	0	0	0	0	巻内川										
26 石質団粒部D	緑灰					0	0	1	1	1	巻内川										
27 石質団粒部E	緑黄					0	0	1	1	1	巻内川										
28 石質団粒部巻越川A	灰白					0	0	0	0	1	巻内川										
29 団粒部A	オリーブ灰					0	0	0	1	2	0	巻内川									
30 団粒部B	灰	2	0	0	1	0	2	637	1	0	巻内川										
31 団粒部C	灰白	2	1	1	2	1	470	1	0	4	0	巻内川									
32 団粒部D	灰	1	1	1	0	126	0	0	0	0	巻内川										
33 団粒部E	灰	1	9	0	1	10	0	1,999	4	1	1	巻内川									
34 団粒部F	灰ヤブ	7	3	3	1	7	3	1,327	2	1	1	巻内川・巻内川									
35 団粒部G	灰白	1	7	4	2	3	0	1,484	3	0	巻内川										
36 団粒部H	灰灰	1	1	1	0	104	1	0	0	0	巻内川										
37 巻内	浅黄緑	4	0	10	13	13	0	3,045	0	0	巻内川										
38 巻内団粒部A	灰白	2	2	1	3	4	2	1,003	2	3	0	巻内川・巻内川									
39 巻内団粒部B	オリーブ灰					0	0	0	1	3	0	巻内川・巻内川									
40 巻内団粒部C	黄灰					0	0	10	10	1	7	0	巻内川・巻内川								
41 団粒部A	灰白					0	0	0	13	3	13	11	0	巻内川・巻内川							
42 団粒部B	灰白					0	0	0	9	0	9	4	0	巻内川・巻内川							
43 団粒部C	灰黄					0	0	2	3	4	1	5	2	0	巻内川						
44 巻内	緑灰					0	0	4	2	1	2	0	7	3	1,900	0	巻内川				
45 巻内団粒部	灰白					0	0	0	0	1	1	2	1	0	0	巻内川					
計		69	103	24	1	132	70	22	1	221	36,960	77	110	13	2	0	0	0	202	0	0
比率 (%)		19	69	11	0	55	24	10	0		38	64	4	1	67	21	7	0	2		

第IV章 まとめ

第1節 史料から見た多神社の建築史

今回の調査は、近世の多神社社殿についての調査が中心となった。

まず、過去におこなわれた多神社の造営について整理しておく必要がある。現在の本殿・拝殿は、18世紀中頃の建築であることが判明している。本殿の東側2棟の棟木に「享保式拾年(1735)柱立」の墨書があり、西側2棟も東側2棟の建築から程なくして建てられたと考えられている。拝殿は、宝暦九年(1759)銘の鬼瓦が載っていたことから、そのころの建築と考えられる。従って、享保～宝暦年間にわたって本殿・拝殿の大造営がおこなわれたことがわかる。

享保～宝暦年間の文書等は伝わっていないが、天理図書館所蔵文書に明和四年(1767)の多社神主・多村庄屋等から寺社奉行宛に提出した口上書の写しがある(「多大明神社修復開帳等許可願書写」)。ここでは、「十市郡多村多大明神社及大破候処」、「氏子言近年甚困窮仕修復寄進等も難」とあり、そのため「当社宝物等於神前為拝」して「辻打小見セ物并水茶屋等二三ヶ所ゾ、境内ニ差置」くことの許可を願っている。享保年間にはじまる神社の大規模な再建工事が、拝殿の鬼瓦銘にある宝暦九年では完了せず、明和四年に至っても修復費の算段に苦しんでいたことが窺われる。あるいは、享保～宝暦年間の改築直後に何らかの災害で損傷を被って修復を余儀なくされた可能性もある。

それ以前の造営記録としては、天正二十年(1592)の「大和国十市郡多宮御造営勅進帳」(天理図書館蔵)がある。また、慶長二年(1597)付の「十市郡多宮御造営勅進帳」(天理図書館近世文書)には寄進者名のほかに上遷宮の費用等が記されており、本殿造営がこのころまでおこなわれていたことがうかがわれる。

天正期・慶長期の2つの勅進帳により集めた資金の石高をみると、天正期の石高が百石余り、慶長期のものが十六石余りと総額に大きな差がある。慶長期の寄進は竣工・上棟・遷宮などの最終段階で必要とされた経費に対する寄進だったのかもしれない。なお、慶長二年の勅進帳に「四之御殿」という表現があることから、天正～慶長の大造営の時には本殿が四座という形に定まっていたようである。

第2節 近世後半の建物について

調査の結果、以下の工程で拝殿の建築をおこなったことが推定される。

・第1段階：拝殿の建築(宝暦年間)

- ① 旧本殿基壇の上及び南側に暗褐色土(第4～8層)を盛る。
- ② 主柱穴20基を掘り、穴に拳大の礎を充填して礎石を据える。
- ③ 礎石間に平瓦を立て並べ、床下の四方を囲む(北側は残存不良)。
- ④ 上部構造物を築造する。ただし、向拝はなかった可能性が高い。

・第2段階：向拝の追加（天明前後？）

⑤向拝用の柱穴を掘削する。

⑥基壇上面に川砂（第3層）を厚さ5cm程度敷く

⑦暗褐色粘質土（2層）を基壇上面縁辺部・拝殿正面の向拝部分に盛る。このとき礎石間の平瓦列が埋没する。

⑧拳大の礫を拝殿正面の向拝部分と背面部に張る。

⑨基壇の周囲に溝を掘り、割石を敷き並べる。その上に延べ石（高さ30cm、幅20cm）を据える。拝殿北側の縁を支える拳大の縁柱礎石もこの段階に据えた可能性がある。

⑩礎石列と延べ石の間を漆喰で覆い、正面張り出し部も漆喰で覆う。延べ石の上に縁柱を据え、拝殿南側の回廊をつくる。また、拝殿北側の縁も同時期につくられた可能性がある。

工程⑤以下は一定の年月が経過した後におこなわれたとみられる。漆喰塗布時に軒下を囲う平瓦列が埋没しており、瓦列形成段階と漆喰塗布段階では一定期間の経過があったようである。また、南側張り出し部の礎石2基の設置には、他の20基とは異なり直径2cm前後の礫を充填しており、工程（設置時期）が別であったと考えられる。なお、向拝東側の礎石は、上面を正方形に加工しているが、側面にも円形の柱をうけるくぼみが残っており、前身建物の礎石を再加工して転用していたと考えられる。

近世中頃に建築された拝殿は、近世後半に大きな改修を受けて今日の姿となっていたのであろう。1つは拝殿の向拝部分を支える2つの礎石の設置技法が他のものと大きく異なっていることから、向拝は後付けであった可能性が考えられる。もう1つは、当初は平瓦を床下の風雨除けとして立て並べていたが、後に基壇周縁に延べ石を据えて回廊を設置し、延べ石と礎石列の間を漆喰張りにした。

第3節 近世初頭の建物について

近世初頭の建物は、1間四方の建物が4棟並ぶ形態であった。この形態は、現在の多神社本殿と全く同一である。ただし、検出された建物跡の支柱穴の間隔を現在の本殿と比較すると、東西の幅は概ね一致しているのに対し、南北の奥行は1.7mと2.75mで約1mの差がある。さらに、現本殿の奥行は、向拝部分を含めて約5mである。これに対して、S B-51～54は北側の支柱穴から基壇南端までの幅が約3mしかなく、全く同じ規格の本殿を想定することはできない。現在の本殿と比較して、向拝部分の構造や建物の奥行には大きな違いがあったのであろう。

次に、この建物の所属時期であるが、南側の前庭部を埋め立ててS B-01の基壇を造成した土に3枚の寛永通宝が入っていたこと、S B-51北東柱穴の礎石抜き取り後の埋土から近世中頃の土師器皿が出土したことなどから、18世紀前半の本殿建て替え直前まではこのS B-51～54が本殿であったことが推測される。問題はこの建物がいつまで遡るかであるが、柱穴に充填された礫に押しつぶされた状態で出土した軒平瓦が室町時代頃のものであり、この柱穴の掘削は中世後半またはそれ以降になると考えられる。従って、今回

検出された本殿は、史料に現れる天正～慶長期の造営によるものであった可能性が非常に高い。

なお、下層遺構として基壇状の遺構を検出しているが、面的な調査をおこなっていないため概要は不明である。天正～慶長期の本殿に先立つ神社建物が同じ場所に建てられていたのであろう。

第4節 多神社の宮郷について

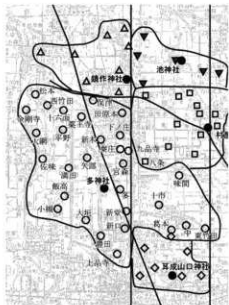
今回、調査で検出した天正～慶長年間の造営と推定される本殿の礎石裏込石及び宝暦年間の造営と推定される拝殿裏込石について、奥田尚氏に分析をお願いした。その結果、本殿の礎は主に巻向川周辺で採取されたもの、拝殿の礎は主に高取川・曾我川周辺で採取されたもので構成されていることが判明した。田原本町付近は盆地中央の低地部で岩石の入手には山沿いの地域まで出かける必要があるが、採取地が時期により異なることは、多神社の影響範囲の変化を考える上で興味深い。天正・慶長年間の寄進帳にみられる村は近世の宮郷とほぼ一致しているが（第35図）、巻向川周辺にしても高取川周辺にしても多神社宮郷の範囲外となる。

天正～慶長年間の造営で巻向川付近の礎が用いられた要因は不明であるが、中世の多神社祭祀を支えた十市氏との関係が背景の一つとして挙げられる。巻向川に近い龍王山城及び柳本城は十市氏の城となった時期があることから、十市氏嫡流が断絶した後も巻向川付近の地理に詳しい者が氏子の中にいたのかもしれない。

一方、宝暦年間に高取川・曾我川の礎が裏込石に利用された原因は不明である。多氏の始祖とされる神八井耳命が葬られたのが畷傍山の北であると古事記等にあるが、近世の国学隆盛を契機に畷傍山周辺とのつながりが生じていたのであろうか。元文二年に「神主多御苗裔植田重治」が記した『大和国十市郡多大明神社記』中には、「神八井耳山陵、畷火山北山本村に在、今称若井耳宮」とあり、多神社との関係が窺われる。また、中曾司村の磐余神社宮司が多神社宮司の兼務だったことがあるという話が「大和志料」に伝わる¹⁾。中曾司村・山本村とも多神社宮郷より外れた地区にあるが、周辺は大きな宮郷組織をもつ神社が少ないこともあり、多神社との関わりが生じる余地があったのかもしれない。

第5節 まとめ

今回の調査は多神社拝殿の建て替えに伴うもので、建物自体の建築年代が文献史料や鬼瓦の刻書により判明する貴重な調査事例となった。



第35図 宮郷配置図

天正～慶長年間の本殿築造は、豊臣秀吉による天下統一から間もない頃におこなわれた。刀狩りが実施され、大和の地侍である国人衆の多くが帰農した頃であり、太閤検地が大和で実施されたのも造営途中の文禄三年である。多神社の大規模な造営がこの時期におこなわれた理由の一つが当時の国人衆対策であったという可能性も考慮する必要がある。

享保～宝暦年間の造営は、明和年間にも社殿復興のための資金確保に苦勞している形跡があることから、都合30年間以上にもわたる長期間の造営となった可能性がある。多神社の宮郷の半数ちかくは郡山藩領であったが、同藩では年貢増徴政策が頻繁に実施されたため、領民の困窮が著しかったという。このような事情も造営工事が長期化した背景にあったのであろう。

註

1) 余談であるが、警余神社（橿原市中曾司町）の拝殿棟端飾瓦の銘に「寛文二年願建、瓦司曾我村佐兵衛作、明和二年修覆、新口村瓦工 榎屋伝兵衛」とあるとのこと（警余神社ホームページより）。榎屋伝兵衛作の鬼瓦は田原本町三笠（下ノ庄）村、矢部村安楽寺、薬王寺村蓮休寺、楽楽寺など田中市郡内の寺院で広く採用されており、当時の瓦の流通圏を考える上で興味深い。また、多観音堂の鬼瓦銘「寛文三年大路堂村」の大路堂村は曾我村の旧名であり、年代も一年違いではないことから、現存しない寛文二年の曾我村佐兵衛銘鬼瓦と同一工人である可能性も考えられる。



拝殿解体後の基壇
(南から)



拝殿解体後の基壇
(西から)



清掃後の基壇
(西から)

図版2 近世末の状況(1)

近世末の遺構
(西から)



東礎石列間の瓦
(東から)



向拝部分の敷石
(西から)



図版3 近世末の状況(2)



南礎石間の瓦列
(西半・南から)



南礎石間の瓦列
(東半・南から)



南東端礎石と
延石抜き取り痕
(南から)

図版4 近世後半の礎石と裏込石(1)



Pit-01(北から)



Pit-06(北から)



Pit-20(南から)



Pit-17(西から)



Pit-14(東から)



Pit-02(南から)



Pit-05(南から)



Pit-03(南から)



Pit-07 (南から)



Pit-08 (南から)



Pit-12 (南から)



Pit-14 (南から)



Pit-18 (南から)



Pit-23 (南から)



Pit-15 (南から)



Pit-02 (南から)

図版6 近世後半の礎石と裏込石(3)



Pit-08 (南から)



Pit-24 (北から)



Pit-18 (南から)



Pit-03 (南から)



Pit-11 (南から)



Pit-09 (北東から)



Pit-17 (西から)



Pit-24 (西から)

図版7 近世後半の礎石設置穴完掘



近世後半完掘
(西から)



近世後半完掘
(向拝部・南から)



近世後半完掘
(東から)

図版 8

近世前半の遺構検出と掘り下げ

近世前半基壇の検出状況

(西から)



基壇造成土

確認状況

(東から)



近世前半の建物跡
検出状況

(東から)



図版 9 近世前半の建物跡 (1)



近世前半の建物跡
検出状況
(西半・南から)



近世前半の建物跡
検出状況
(東半・南から)



近世前半の建物基壇
南端の堆積状況
(西から)

図版
10
近世前半の
建物跡
(2)

SB-51 検出
(東から)



SB-52 検出
(東から)



SB-53 検出
(東から)





Pit-51(南から)



Pit-52(南から)



Pit-53(南から)



Pit-54(南から)



Pit-55(南から)



Pit-56(南から)



Pit-57(南から)



Pit-58(南から)



Pit-59(南から)



Pit-60(南から)



Pit-61(南から)



Pit-62(南から)



Pit-63(南から)



Pit-64(南から)



Pit-65(南から)

図版 13 近世前半完掘 (1)



近世前半 全景
(西から)



近世前半 全景
(東から)



SB-51
(南から)

図版 14
近世前半完掘 (2)

SB-52

(南から)



SB-53

(南から)



SB-54

(南から)



図版15 基壇の断面



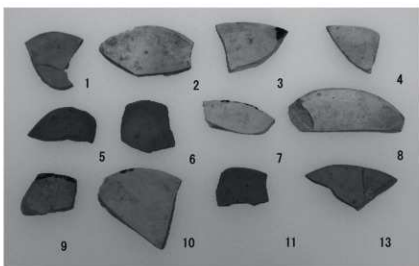
基壇中央断割
(中央南・西から)



基壇西側断割
(北端・東から)



基壇西端断割
(南から)





31



36



37



33



42



43



34



35



38



39



40



41



44



45



46



32



47



48

图版 18
出土遺物 3
軒平瓦



49



50



51



52



53



54



55



56



58



59



57



60



62



61



63



64



65



66



69



70



71



72



73



74



75



76

図版 20
出土遺物 5
棧瓦・平瓦



77



78



79



80



81



82

ふりがな	おおいせきはっくつちょうさほうこく							
書名	多遺跡発掘調査報告 ー第18次調査ー							
副書名								
巻次								
シリーズ名	田原本町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	3							
編著者名	清水琢哉・西岡成晃							
編集機関	田原本町教育委員会							
所在地	〒636-0392 奈良県磯城郡田原本町 890-1							
発行年月日	令和4年3月25日							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡					
おおいせき 多遺跡	ならけんしきぐん 奈良県磯城郡 たわらもとちょう 田原本町 おお 多	293636		34° 34' 04"	135° 48' 15"	19980928 ～ 19981102	151 ㎡	神社拝殿の 改築
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
多遺跡	集落 寺社	弥生 古代 中世 近世	礎石建物跡	弥生土器・土師器・ 須恵器・瓦・銭貨		近世後半の多神社拝殿と 近世前半の多神社本殿		

田原本町埋蔵文化財調査報告書 第3集

多遺跡発掘調査報告

－第18次調査－

令和4年3月25日

発行 田原本町教育委員会

印刷 株式会社 明新社